

地方と都市を結ぶホットライン・マガジン

でほら DePOLA 42

2012年

特集 **新たなコミュニティの実践
農山漁村の再生**



新たなコミュニティの実践 農山漁村の再生



▶地域おこし協力隊を修了して町に定住、ラーメン店を経営する

▼和田峠スキー場跡に植林して森を復元する



▲子供たちの元気な声が溢れる川根地区



▲北海道おといねっぶ美術工芸高校で学ぶ生徒



▲地域おこし協力隊で金砂郷地区に移住、蕎麦打ちを学ぶ



▲大浦漁民が始めた「ひと網オーナー制度」



▲温泉熱を利用して観葉植物日本一の栽培地に



▲簡易水道施設を改修したいの町小塩地区



▲1ターンの女性が地域特産品を開発販売(「龍神は〜と」)
▲上秋津野では地区がレストランや産直店を経営

山間部には高齢世帯だけが暮らす集落が点在している。高知県にはスーパー等の移動販売車が山間部を巡回する制度があるが、ガソリンの値上げ等で廃止に追い込まれているため、県が車代の一部を助成して巡回を続けてもらい、高齢者の見守り役もお願いしている。

同様に病院の送迎や簡易水道施設の改修、防獣ネットの設置等々は、高知県に限らず過疎市町村が抱える共通の緊急課題であり、街中でもガソリンスタンドや日用品を売る商店が消える地区が増えている。しかしこれらの問題が多少とも解消すれば、山深い里は自然豊かな別天地。住民は地域に愛着と誇りを持ちながら自立的な生活を送り、これからも住み続けたいと望んでいる。そのため行政は、設備の改修費の助成、地域支援員の巡回等、生活支援に一層力を入れるようになったが、運営は地域住民やNPOが行うことで、元気な地域が増えてきた。

さらに、農山漁村の再生に見逃せないのが、総務省が力を入れている「地域おこし協力隊」制度。都市からの若い人がやってくることで地域が大きく変わるわけではないが、断然明るくなっていく。自然や農業を新鮮に感じる若い世代がいることが、村人には何よりも嬉しく、彼らから自分たちの地域の良さや農業の大切さを学び直すという。植林や草刈り、災害地へのボランティア活動にも学生や若い女性たちの参加が増えており、これに定年を迎えた中高年者の交流・支援活動が活発になれば、農山漁村の再生に期待できる。そんな様子を各地で拝見した今号であった。

「新たなコミュニティの実践——農山漁村の再生」

●特集企画に寄せて——2



▲移動販売車で買物をする住民たち

■広がる支援ネット

●一人でも待っていてくれる人の元へ

中山間地域の住民をサポートする

高知県仁淀川町・越知町・いの町——4

●市民・学生ボランティアが参加して

スキー場跡地に森林を復元

長野県長和町——8

■住民の創意工夫で

●資源を活かす、天草の漁師魂

「ひと網オーナー制度」

熊本県天草市有明町大浦——11

●子供やお年寄りはムラの宝物

油屋・万屋・車屋を地区で運営

広島県安芸高田市高宮町川根——14

●きめ細かい集落再生活動と市民交流

「元気かい! 集落応援プログラム」

和歌山県田辺市——18

●卒業生が歩みはじめた定住生活

協力隊から起業・就業

北海道喜茂別町——22

「自然エネルギーが地域の活性化剤」

●豊富な温泉熱を利用して

観葉植物栽培日本一

鹿児島県指宿市——25

●自然と向き合い、森・水・風を活用する

環境モデル都市・檜原

高知県檜原町——28



▲ひと網オーナーを見送る坂口夫妻



▲温泉熱で栽培する観葉植物



▲機械の扱い方を学ぶ高校一年生

■若者の感性を活かす

●女子大OB生たちの

田舎暮らし&地域おこし

茨城県常陸太田市里美・金砂郷——30

●北海道一小さい村の、日本一熱い学舎

村立「北海道おといねっふ美術工芸高等学校」

北海道音威子府村——34

INFORMATION 38, 39

農山村の人々と交流・支援する／50歳から始める「極奥三河」地域体験・地域産業支援プログラム、高校生が森・海・川の「名人」を訪ねる「聞き書き甲子園」

地域資源を美味しい特産品に／雑穀在来種を保存・活用(山梨県小菅村)、「すんき」乳酸菌で作るヨーグルト(長野県木曾町)、島の元気を発信「甘夏かあちゃん」(佐賀県唐津市加部島)

全国過疎問題シンポジウム「2012 in あいち」

編集後記／奥付

「でぼら」とは——

Depopulated Local Authorities (人口が減少した、つまり過疎化した地方自治体)からのネーミング。

過疎市町村の多くは山間地や離島など森林面積の多い農山漁村地区で、全般に人口の減少や高齢化が進んでいます。国土の保全・水源のかん養・地球の温暖化の防止などの多面的機能により、私たちの生活や経済活動に重要な役割を担っています。このような過疎地域は、豊かで貴重な自然環境に恵まれ、伝統文化や人情あふれる風土が数多く残っています。

多くの人たちが過疎地域を理解し、過疎地域と都市地域が交流をすすめる、共生していくためのホットラインとして、また過疎地域相互間の情報誌として「DePOLA」(でぼら)を発行しています。

●表紙写真

上左／移動販売車が山間地の集落を巡回する(高知県越知町)

上右／地域おこし協力隊として活動する女子大OB生たち(茨城県常陸太田市里美)

下左／「ひと網オーナー制度」の参加者。3.5kgのカンパチを手に(熊本県天草市有明町大浦)

下右／ほたるまつりの提灯とエコミュージアム(広島県安芸高田市高宮町川根)

広がる
支援ネット

一人でも待っていてくれる人の元へ 中山間地域の住民をサポートする

高知県に仁淀川町・越知町のいの町



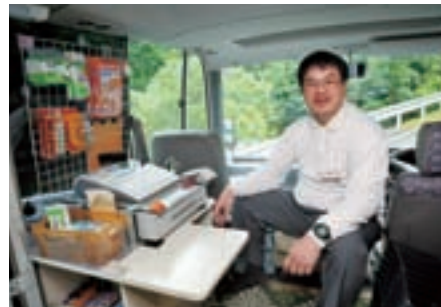
▲ハッピーライナー号が山道を登って行く



▲眼下に街を望む集落到着



▲マイクロバスの中はミニスーパー、新鮮な商品を豊富に品揃え。買物する岡林さん



▲車入口に設けたレジに立つ中山さん

が、今日は一人もお客さんがいなかったと、やや疲れた様子である。買物を希望する人は、時間に合わせて道路に立つか、目印の旗を立てて置くのだと言う。

中山さんは、「すみません、お昼を食べるので20分ほど待つてください」と言いつて車を道路から少し入った空き地に停めた。

運送業の仕事をしてきたが、2年前に山間集落のために役立ちたいとサンプラザのキャブテンに応募した。朝7時頃に出社して、その日ハッピーライナー号で販売する商品を積み込む。「あの人はこの商品、この人はこれが好みと顔が浮かんできます。注文いただいたものも翌週必ず届けています」

無口だが頼りになる誠実な人と、皆から大変信頼されているようだ。

短い休息時間を終えると、ハッピーライナー号は坪井川に沿って山道を登り始めた。約10分程行くと斜面に数軒の家が立ち並ぶ集落が現われて、道路に買物籠を持った女性、伊藤夏美さんが立っている。中山さんが車を停めてドアを開けると、早速伊藤さんは中に乗りこんだ。

車の中はスーパーマーケットをそっくり再現したように冷凍ケースが両サイドに設置されていて、肉から魚介類、惣菜、乳製品までコンパクトに包装されて並んでいる。原則としてスーパーで売られ

山間集落を巡回して、食品や日用雑貨品を販売してきた「移動スーパー」「移動販売店」だが、集落人口の減少で売り上げが落ち込んだ上、ガソリン等の高騰で営業を辞める商店・企業が出てきた。山間部に住む高齢者にとって週一度も来てくれる移動スーパーは命綱。買物弱者をつくってはいけないと、高知県が支援に動き出した。また、集落の簡易水道施設の場合も同様に県と町が助成して設備の整備に取り組んでいる。

移動スーパー「ハッピーライナー」が 13市町村を巡回

この日高知県産業振興推進部中山間地域対策課の坂本寿一課長補佐と木下美喜主幹が案内してくれたのは、仁淀川町の山間集落を移動販売する大手スーパー・サンプラザ（本店／土佐市）「ハッピーライナー」の4号車。サンプラザは県の支援もあつて現在6台の移動

販売車が13市町村を週1〜2回巡回している。取材では仁淀川町の27カ所を巡回する木曜コースを追跡させていただいた。一カ所を数分単位で移動していくので、その車に出会うのも結構大変だ。

高知市内を出て約2時間、霊峰石鎚山いづるぎに源を発し、最近、「仁淀ブルー」で脚光を浴びている清流・仁淀川の景観に見惚れながら上流部の安居地域へ到着した。仁淀川に注ぐ支流・安居川のさらなる支流、成川と坪井川が合流して溪谷美を作っている地区で、清流沿いには道路と家々が建ち並んでいる。かつて商店だったと思われる空き家の前で待っていると、サンプラザという名前をつけた真新しいマイクロバスが坂道を降りてきた。

キャブテンと呼ばれる運転手兼店長は中山耕滋さん（50）。朝9時半頃から山合いにある田村、坂本集落などの7、8地区を回ってきた



◀買物を終えて「ありがとう」と何度も会釈していく岡林さん（左）、車は再び川沿いの集落へ降り、次は反対側の集落へ向かう



ている価格を維持している。菓子やティッシュペーパー、洗剤、鎌等の日用品も上手に配置され、その数は約300種。

買物を終えた伊藤さんは「夫婦二人暮らしです。主人は足が弱ったので車の運転を止めため、サンプラザさんがとても頼り。本当にありがたいです」と言う。いつも乳製品を中心に4000円ほど購入すると言う。

車はさらに上の集落に向けて出発。間もなくさらに勾配がきつくなった斜面に6、7軒の家々が建ち、道路に降りて岡林宏茂さん(80)、江美香(75)夫妻が待っていた。

「以前は、車はこの下までしか来てくれませんでしたので、とてもありがたい。何でも揃っていて小パックで、価格も高くありません」と言いつて、奥さんが中心に5000円ほど購入した。衣類等は、町が派遣してくれる送迎車で医者へ行く時に購入する。「いまここで暮らしているのは私たちだけです、住めば都でいいところです。皆さんにはお世話かけますが、下へ降りる気はありませんね」とご主人。先人達が築き上げた石組の上に建てられた木造家屋は納屋、居間と機能的に配置され、

一日中陽が当たり風通しがよい。僅かな平地は野菜畑に耕作され、大抵が自家栽培で間に合うという。周りの山々は山菜の宝庫で、遙か下方に街や仁淀川を望む桃源郷である。

そのあと車はUターンして、平地の多い下の方の集落へ。車が着くと3、4人の女性が集まってきた。若い主婦もいるが、歩行がやっとなというお年寄りもいるため、中山さんは下車すると手足を伸ばして少しのんびり。しかし、買物客が去ると、あわただしく反対側の山深い集落へ向かって出発していった。

サンプラザは高知県内に10店舗、他に食品専門店やホームセンター等を経営する県内大手スーパーの一つだが、過疎化で悩む山間地域が多いことから、社会貢献事業の一環として30年近く前から移動販売車が山間地区を巡回してきた。しかし顧客の減少でガソリン代も出ない地域があるため、巡回コースから除く地域もやむなしと検討してきた。

だが、巡回を止めたい地区ほどハッピーライナーを必要としている。そのため平成20年から県と市町村が新規車の購入費と設備費の3分の2を助成する「生活物資の確保」補助事業を発足、「地域見守り活動」の役割も担ってもらいながら、運行を継続してもらっている。商品のほかに安心と笑顔を配達することをめざしている。

魔法のトラック「近沢ストア」

蛇行して流れる仁淀川にかかる沈下橋、その先の丘陵地には茶畑が広がる越知町。山間部が多い仁淀川町に比べると斜面は全体に緩やかだが、家々は斜面を利用して軒を寄せ合

うように建てられている。

そんな越知町の中山間地を移動販売しているのが、町内で商店を経営する「近沢ストア」の近沢俊明店長(72)。濃紺の幌をしたトラックが、中村美律子の演歌「河内おとこ節」を流して桐見川地区の道路脇に停車、店開きを始めた。

トラックの幌が開くと雨も防いでくれる屋根になる。左右に設けた棚には商品がぎっしり並んでいるが、近沢さんは中ほどから次々とトレーや発泡スチールのボックスを運び出して地面に並べる。和菓子やパン、漬物、奥さん手作りの惣

菜、魚介類、野菜、果物等々があり、待っていた女性客たちは目を輝かせて品物選びを始めた。そのあとはあれこれと買物をして、お喋りにも花が咲く。



▼お喋りしながら買物を楽しむ女性たち



▲幌を上げて開店準備する近沢さん。待っていた女性たちの買物が始まる



住民にショッピングする楽しさと話す楽しみを提供している近沢さん。高齢者の健康にも気遣いながら買物を手伝い、忙しくレジをする。「一度、今日は14カ所を回ります。一カ所で30分間店開きするのですが、話が弾んで閉めにくいこともあります」

近沢さんが町内を移動販売するようになったのは30年前。「サンプラザが始めたことがきっかけで、客を店で待っているだけの商売ではだめだと思って始めたのですが、皆が待っていてくれるので止められなくなった。豪雨の日だから今日は止めようと思っても気になって行ってみると、皆がカッパを着て待っていました。一人でも待っていてくれると思うと休むわけにはいきません」

越知町佐之國と仁淀川町の40カ所を週1、2回ずつ巡回し、土曜日にはシャッター街を賑やかにしたいと商工会に頼まれて、街なかで息子さんも手伝って店開きする。しかし20年前に比べると客は1/3になった。

「いつも来るのに顔を出さない男性がいて、気になるので後で家まで行ってみたら亡くなっています。義務ではありませんが、地区長さんと連携して見守りの役もしています」

改装トラックには520万円かかったが、県と町が1/3ずつ助成してくれた。荷物の上げ下ろしには手間と労力があるが、商品を地面に並べて見てもらう手法は、足の悪い老

人でも手にとって買物ができるようにという近沢さんの工夫でもある。

桐見川下流の西浦地区を終えて商品を収納すると、10軒程の家が山肌にへばりつくように建つ上流の集落へ。半分が空き家でいま4世帯しか暮らしていないそうで、夫婦そろって全員が石段を下りてきた。「近沢さんの顔を見んと週末が来んのよ」と男性の一人が言う。「ありがたいですよ」「待っているんですよ」と深々と頭を下げ、買物袋を提げて坂を登って帰って行った。

中山間地域を多様に生活支援

高知県は人口の減少化と過疎化が早くから進んでおり、平成22年現在、人口減少率は秋田県、青森県に次いで全国第3位のマイナス4・0%（全国平均マイナス0・23%）。高齢化率も同様に3位で28・8%（全国平均23・0%）。特に中山間地域でその傾向が顕著で、担い手不足による産業活動の衰退、集落の活力低下への積極的な対策が求められている。

高知県では国勢調査の度ごとに「集落データ調査」を実施してきたが、今回新たに中山間地域のおおよそ50世帯未満の1359集落を対象に、集落活動や生活、産業について聞き取り調査、及び2607世帯にアンケート調査を行った。

その結果、集落の「共同作業への参加」は62・4%の人が「参加している」と回答しているが、今後については66・9%が「維持できない」「わからない」と回答。「集落の10年後」については「衰退している」63・8%に加えて、「消滅している」「消滅の恐れがある」が

11・3%になっている。

一方「生活（生活環境、安全・安心）」面では、飲用水施設の維持管理や高齢化等により管理人員が不足、生活用品の確保、車やバイクの運転が出来ない等の不安や不便さを上げている。健康面や生活費の不安等は高年齢者が抱えているが、高知県の調査では、「食料品や日用品の商店が近くにない」(36・5%)、「野生鳥獣の被害」(32・6%)、「病院や診療所が近くにない・遠い」(32・4%)と回答した人が各3割以上あり、超高齢化集落が抱える深刻な課題が数値で示されている。

産業については、集落の主要産業は農業であり、今後の活性化にも農業の振興が大切だと回答しながらも、耕作放棄地が「ある」は65・0%、手入れされない山林が「ある」は69・4%に達しており、高齢化と人手不足は集落の維持に大きく影響している。

しかし「集落には住み続けたい」人は76・7%、「集落への愛着や誇りをもっている」人は93・0%で、様々な課題はあるが、誇りと愛着をもって集落に住み続けたいと願っている。

この調査をもとに、高知県では中山間地域対策課が中心になって集落同士で連携する地域の拠点づくり、通院や買物のための移動手段の確保、高齢者が栽培した野菜などの農産物を企業やNPO等が集荷する仕組みづくりへの支援などを行っている。

車を山間地へ走らせながら、施策や夢を語り続けてくれた中山間地域対策課の坂本課長補佐、木下主幹のガッツある熱いまなざしに、「住めば都でいいところです」と言っていた老人の笑顔が重なった。

町と県が助成して上水道施設の改修

翌朝は県庁を8時半に出て、いの町役場へ寄り、上下水道課の川村敏之課長補佐、宮脇美智主幹のガイドで、最近簡易水道施設を改修した、いの町中追地区小塩集落へ向かった。

山間地区では、集落単位で簡易水道施設を設置している場合が多いが、設備が老化して水漏れしたり、雨が降ると濁って飲用水に使えないケースが多発している。住民は高齢化して修理は困難、改修費用も負担しかねているのが現状で、県や町の助成が必至である。

いの町は高知市に隣接し、国道沿いには土佐和紙工芸村などがある賑やかな街並みが続いているが、間もなく国道を右手に入っていくと、勝賀瀬川の周辺に水田と集落が広がる田園地帯、やがて山々が連なる鬱蒼とした山林に一変する。上流には四国の自然百景に選定される中追渓谷がある。それを過ぎると道路は眼下に深い渓谷を望む狭くて険しい山道になり、その先に集落があるとは思えないほど。しかし約30分程走っただろうか、いきなり溪流が現れ、その周辺に家々が立ち並ぶ集落が現れた。かつては27戸あったが、今は7世帯、16名が暮らしている小塩集落である。

溪流に架かる橋の袂に集会所があり、我々が到着すると早速住民が集まってくれた。伊藤秋義さん(72)、伊藤武さん(68)、中園春幸さん(60)、皆奥さんも元気で現役で働いている。お茶を入れてくれた伊藤孝子さんだけは早くに夫を亡くし、二人の娘も嫁いで一人暮らしだが、「小塩ほどいいところはなほ。皆仲良しで助け合って暮らしている。週一度は皆

が集まって食事会をしているの」と語る。

水道施設について、二人の伊藤さんから「ここから2km程行った奥から飲み水を引いているのだが、台風の後には濁ったり枯葉が詰まって水が出てこなかったりして、週一度は掃除していました。でも、もうタンクも新しいのに換えないといかんようで」年取ってきたので山まで見回りにいくのは辛い。そこで町の水道業者に点検して新しい設備を見積もってもらいました」と説明があった。

地元の水道会社が見積った書類を見ると、取水口とタンクを新しいものに変更、タンクから集落まで給水するロープを換えることで、その費用は約217万円。改修費の2/3を県、1/3を町と小塩集落が負担することになり、昨春秋に改修工事を行った。集落の負担は36万円余、1戸当たり5万円余で飲用水が安心して使えるようになった。

「我々はアンテナ施設を含めて、月3000円を徴収しているの、水道施設費もそこから出せました。県や町には感謝感謝です」と言う。

2km先にある取水所へ案内してくれた。集落からさらに山道を登っていくと左手の山から湧き水が流れ出している。奥には1000m級の山があるため、一年中水は枯れない。道を入れて10m程の場所に設けた取水口は、新たにコンクリートを築いて落葉が入らないようにしっかりと蓋をした。その下に水を貯めるタンクがあるが、旧施設も生かして改修。タンクに取り付けた真新しいポリエチレンの管は長さ3km程あり、落差を利用して森を通じて小塩の貯水溝へ天然水をお届けしている。

いの町上下水道課の川島さんは「ここはま

だ周辺に豊かな水があるので設備を更新しやすいが、中には取水場が枯渇してしまったり、地形が変わってしまい新たな取水場が必要な地区もあります」と言う。また担当の宮脇さんは「いの町では昨年3カ所、今年は2カ所を整備します。費用は地区によって異なり、町が全部負担する場合、逆に集落が工面する場合もあります。設備費を県が支援してくれる方針なので助かっています」

今後とも日常的な管理は住民が行い、一度は業者に保守点検を要請していく予定だ。

山から下りて来ると小塩集落が桃源郷のように見える。伊藤武さんが目を輝かせて「ここには未来の希望の星がいる」と言っていた家には、1歳の子供を連れて里帰りしている母子がいる。子供の声や笑顔の素晴らしさを久々に味わう隣人たちは、親子を地域の宝物として支援していきたいようだ。

(文)浅井登美子 写真/小林恵



◀上左/改装した取水口を見守る
右/小塩地区の世話役をする伊藤秋義さん、伊藤武さん、中園春幸さん
下/小塩地区の住民の皆さんと
左端・川村課長補佐、右端・宮脇主幹



広がる
支援ネット

市民・学生ボランティアが参加して スキー場跡地に森林を復元

ながわまち
長野県長和町

スキー場を10年かけて元の森に

各地に森を切り開いて作られたスキー場。その多くがバブル経済の崩壊とスキー離れ等で、経営が成り立たなくなり廃業に追い込まれている。中山道の最高地点にあり、霧ヶ峰や白樺湖、美ヶ原等と並ぶ観光拠点の一つ和田峠も、旧和田村が冬季の観光にと国有林を借りてスキー場を作ったが、平成14年に閉鎖した。

その山を林野庁に返還することにしたが、スキー場開発以前の形に戻して還すように定められている。それがカラマツ林。木材として不人気のカラマツを植林するなんて思ってたが、標高が高く冬の積雪も多いこの山では広葉樹等は育ちにくいそうで、周辺林と同様のカラマツを植林することになった。

スキー場だった用地は総面積約7・42haの斜面で、植樹するカラマツは計1万7066本。植林後10年間手入れ保全してから返還する。すでに昨年の6月に第一回目の植林を行い、1haの斜面に2300本を植林した。

長和町から相談を受けて森林復元計画を立ててきた長野県林務課が、植林作業の助っ人に考えたのが「森のライフスタイル研究所」だった。同研究所はもともと長野県が森林の保全を市民参加で行っていくために組織した



▲昨年もカラマツの植林に参加した丸子修学館の高校生

関東各地の山林で植林や再生、津波被害にあった海岸保安林の復興等の活動を行っているNPO法人「森のライフスタイル研究所」が、今年3回目の植林として、スキー場跡地を元の森に復元する活動を行った。6月上旬の土曜日、標高1400mの長野県長和町和田峠には、東京からバスでやってきた100名近いボランティア、大学生、地元の小学生や高校生等180名が参加して、土砂降りの中で約2haの斜面に4000本のカラマツを植樹した。

団体で、県と市民、協賛する企業によるNPO法人になっている。伊那市に本部、東京、栃木、京都にオフィスがあり、年間を通して様々な活動をしている。特に、東京は代表理事所長竹垣英信さんの気さくな人柄とフットワークの良さに加えて、ブログによる参加の呼びかけと活動報告等が注目され、植林経験のない若い人の参加が増え、彼らがりピータ



▲挨拶する羽田長和町長



◀植林について説明する「森のライフスタイル研究所」竹垣代表理事所長



▲東京から来た参加者が整列。すでに地元の子供たちが植林を開始している ▼きつい斜面を登って行く



ーにもなっている。

その日の朝、参加者100名の乗ったバスは、新宿西口を7時に出発、10時前に和田峠・長和町観光協会が経営する「農の駅」に到着した。あいにくの雨模様のため持参の雨合羽を着て広場に集合した。若い女性の参加が多い。他に長和町小学5年生の「和田みどり少年団」の児童13名、東京農業大学生20名、県内の高校生グループ10数名に地元住民も参加、総勢180名が参加して4000本のカラマツ苗を植林することになった。

参加費は一人1000円。これは今後この森の下草刈りや鹿等の被害を防ぐ柵の設置費用に充てるための基金で、すでに鹿の侵入を防御するため数キロに亘って柵を設けている。バス代等は、毎回企業等からのNPO事業助成金が充てられるため無料である。

町からは羽田健一郎町長や役場職員、県からは林務課の山口課長等が出迎えて、早速開会式が行われた。

羽田町長は「あいにくの雨で気温は15℃、風邪を引かないように注意してください。ここは標高1400mあり、中山道の難所だった場所ですが、昔ここを京から江戸をめざして和宮皇女が通ったと思えば、感慨もあります。心に残る植林をして、その木がどうなったかを見にまた訪ねてください」と挨拶。県地方事務所林務課の山口課長からは、スキー場跡地の森の復元について説明があり、昨年植えた苗木が立派に育っており、今日の雨天は植物にとって恵みであると述べた。

昼食には、お母さん達が早朝から用意したおにぎりや地元名物のキノコ汁がふるまわれ

る。その後、近くの長門温泉で休息するようにと無料入浴券も用意された。

「爽やかだ」とてもいい経験」

竹垣所長の指示で参加者は4班に分かれ、各班ごとに班長がついた。鍬が配られ、「エイ・オー」の掛け声と共に出発進行、山に向かう。山は地元ボランティアと森林組合が事前に下草刈りをし、植林する場所にポールを立てている。「この準備こそが大変なんです。皆さんしっかり掘って苗を植えたら、足で踏み固めてください」と班長の池田さんが言う。「森のライフスタイル研究所」が毎年実施している佐久市大沢のヒノキの森作りに参加したのが縁で研修を受け、毎回参加者の指導に当たっている。

地面は雑草や笹の根が張っていて、鍬で掘るのにかなり力がある。30〜40cm程の穴を掘り、50cm程に育てた苗木を真つすぐに植える。始めて参加、鍬を持つのも始めてという女性たちは悪戦苦闘しながら、それでも手を休めることなく頑張っている。

きつい斜面を登って行くと、山麓際は土がほくほくしてきて、植林が順調に進行していた。企業から仲間数人で参加している人たちが健康作りを兼ねて一人で参加した男性、研究所が開催する活動にはほぼ毎回来るという中年の女性等、雨足が強くなり霧が出てきた中で皆汗だくになりながら働いている。すぐ近くの林から鶯が鳴いて、歓声の音が上がった。下の方の斜面では、「和田みどり少年団」の児童と東京農大の学生たちが手際よく植林している。和田小学校では小学5年生が一年間



▲指導員から穴の深さや植え方等を聞く始めて参加の女性たち



植林や花植え等の緑化活動に参加する習わしだそうで、お揃いの可愛い制服が似合っている。5m先は見えないほど濃霧が出てきて、山も人も幻想的である。約2時間で4000本の苗木を植え終えてグループごとに下山しはじめた。「とても清々しい」「味わったことのない経験、いい思い出です」「植えた木が根づくか心配なのでまた来たい」「持参した安いカップは役立たずでしたので、次はしっかりした作業用のものを用意します」等々、雨と泥と汗で濡れた顔をほころばせて語った。役場が用意した給水車で顔と手を洗い、テントの中に用意されたおにぎりや暖かいキノコ汁を食べた。作業を終えての少し遅めの昼食を「美味しい」と頬ばる若い女性たちの足

▶右/会社の同僚が誘いあって参加した大澤さん、大井さん
中/初めて参加したが「楽しく楽しい」と語る金田優子さん
左/ほぼ毎回来て黙々と作業する女性



▲地元の小学生の作業を手伝う東京農大生

元は泥だらけだが、気にする様子はない。ころなし逞しくなったように見えた。

東京農大の「山村再生プロジェクト」

前日から長和町に来て農作業等を手伝い、植林でも手慣れた働きぶりが光っていた東京農大生は、植林のあと、続いて別の地域へ防獣用ネットを張る作業に出かけて行った。長和町には月1、2回15〜20名が来て、地域住民と交流、協働しながら様々な作業や実習活動を行っているという。

東京農大・国際食料情報学部食料環境経済学科の学生たちが長和町を一つのフィールドワークにして活動する「山村再生プロジェクト」は、学生自らが山村地域の課題を把握して、解決策を考えて実践し、成果を検証して再び実践するという地域再生・活性化の総合プランナーをめざすもの。

平成20年にスタートし、月1度以上、一回の実習で4〜7日は滞在、年間延べ2000人の学生が訪れているという。実習では、特に休耕地の再生に力を入れてきた。原野化し

た農地を再生して年間50種の野菜や水稻を作付けし、その収穫物を使って味噌や漬物作りにも挑戦している。また、学生の視点で地域再生プランを作成して、町会や議会など有意義な交換も行ってきた。

24年度のテーマは、さらなる躍進をめざした「地域に学び、地域が育てる山村再生・活性化の人材育成プロジェクト」。学生主導で産学官連携の協働・実習会を行い、収穫農産物の販売マーケティングにも取り組むという。「山村地域にこそ都会に失われたものがたくさんある。それを活かしていくお手伝いです」と指導に当たる農大の望月洋孝先生は答えた。農大生の活動は地元の高校生にも影響を与え、丸子修学館高校からは今回の植林に13名が参加した。

津波被害の保安林の再生

昨年3・11東日本大震災は東北地方に壊滅的な被害をもたらしたが、比較的知られていないのが九十九里浜を中心とする千葉県の海岸。防風林には塩水と流木・廃材等が流れ込み、樹木が次々枯れている。枯れた木を伐つてチップにして、新たにクロマツ、トベラ、マサキ等を植樹、さらに下草刈り等の作業も担っているのが「森のライフスタイル研究所」の昨年からの今年の主要な活動である。

例えば、今年は1〜4月には3回、九十九里浜保安林の伐採と林内整備、植林（延べ1万2000本）を行い、7月、8月には下草刈りを行った。参加した東京からのボランティアと地元住民は延べ1000名に迫った。

10月以降も新たな海岸2カ所で保安林の再



▲作業を終えて記念撮影

生を予定している。

また毎年実施してきたのが、佐久市大沢・崩壊林の除伐と地揃え・植林、山火事で燃えた長野県東御市田之尻地区の森にどんぐりの森を作るプロジェクト等。

その都度インターネットで一般市民やリピーターに参加を呼びかけ、人手を確保している。海岸に6000本のクロマツ等を植樹した時は親子連れの参加が多かった。日帰りの日程で実労は3〜4時間のため、気軽に参加しやすい。長和町のカラマツ林は9月8日に下草刈りを行い、東京から約50名が参加した。

これらの活動はNPO事業支援として日本たばこ産業、トヨタ自動車、コスモ石油等の助成金で行われており、ほかにチップをペレットに加工して企業が暖房用に使う協力体制もある。参加者にとっては、作業でいい汗をかいた後、温泉に入り、地元特産の昼食を食べたり、地域の人や参加者と交流するのが楽しみの一つになっているようだ。

(文/浅井登美子 写真/小林恵)



▶地元の主婦らが用意したおにぎりとキノコ汁に大満足の参加者たち

●NPO法人森のライフスタイル研究所
本部(伊那市) ☎0265-74-7996
東京事務所 ☎03-6427-6369
<http://www.slow.gr.jp/>



住民の
創意工夫で
①

▲出漁する坂口司さん家族の記念写真

風景の美しさはもちろんだが、天然資源の豊富な八代海と有明海を隔てるように点在する天草諸島。その一つ、天草上島北側の天草市有明町大浦地区で「ひと網オーナー制度」が、今年始まった。地元漁師が自らの仕事として設置している小型定置網のひと網を、オーナーと一緒に引き上げ、獲った魚すべてを持ち帰ってもらう

資源を活かす、天草の漁師魂 「ひと網オーナー制度」

熊本県天草市有明町大浦

という制度だ。天草の漁師魂にも触れることができ、地元資源の活用方法として、これほどのものが他にあるだろうか。

漁師夫妻の 息の合ったサービスで

今にも雨が降りそうな曇り空。しかし、海は穏やかな表情を見せていて、入り組んだ半島や島々に囲まれた有明海域に出漁するには問題はなさそうだ。天草市有明町大浦漁港の浮き棧橋では、漁師の松本仁さん(52)と悦子さん(52)夫妻が、鯛正丸の準備を整えて、ひと網オーナーの到着を待っている。

今年5月から始まったばかりの「ひと網オーナー制度」は、普段から大浦地区の漁師が魚をしている小型定置網の中の二つの網を、申込者(オーナー)と一緒に引き上げ、その網に入っていた魚すべてをオーナーが持ち帰るといった豪快な制度である。季節や天候によって定置網に入る魚の種類は異なるし、その日によって大漁不漁も当然で来る。それらすべてを、漁師が漁をする時と同じように運不運として受け入れ楽しんでほしいというのだ。ひと網1万円、新鮮な魚をもらう実益があり、どんな魚が入っているかわからないお楽しみもある。予定の午前10時より30分早く、オーナーの坂口司さん(56)の家族が、熊本市内から到着した。挨拶もそこそこにして乗船し、鯛正丸

が棧橋を離れた。港の防波堤を過ぎると、10分足らずで定置網に到着する。船酔いをする時間もない。その間に、悦子さんがオーナー家族の記念写真を撮ったり、不安を覚えないうちに声を掛けたりサービスに大忙しだ。

定置網に到着すると、松本さん夫妻の息の合った作業で、大きな輪になっている定置網の袋を引き上げていく。「今日は網が重かけんようけ入つとるごつあつですたい。今ごろの季節はコノシロの入つとると」と、仁さんが説明しながら網を引き上げる。オーナーの坂口さんが待ちきれないといった風に、網を引き上げる松本夫妻の間に入って一緒に網を引き上げ始めた。坂口さんは、もともと釣りが好きで、磯釣りには釣りやすく出かけるのだからだ。

「釣りは自分独りの楽しみだけど、ひと網オーナー制度は、家族にも面白さを知ってもらえるし、釣りは1日か

◀網を上げる松本さん夫妻
左/魚を船倉に移す坂口さん





▲船の上でコノシロをせごしにさせていただく
▶持ち帰り用に魚を仕分け
▼エイはリリースした



▲さっそく刺身を試食

▼仕事を終えて松本さん夫妻



▲野菜もお土産にもらう



かるけど、定置網は短期決戦で新鮮な魚が手に入るのが良いですね」
毎週独りで釣りに出かけている罪滅ぼしの気持ちもありそうだ。

驚きの大漁だ！ 持ち帰り用に梱包して5箱以上

袋の底が見えてきた。銀色に光るコノシロを始め、何やら大きな魚も入っている。大漁だ。袋の中から大きなエイが出てきた。「おおっ」と皆が驚く。坂口さんはタモ網で魚を掬って、定置網の袋から船倉の生け簀に移し替えている。コノシロの他に、ミズイカ、ヤリイカ、フグ、アカグチ、シログチも入っている。大きなボラが1匹入っていた。

船の上で、悦子さんはコノシロのせごしを造っている。船べりから汲み上げた海水にさつと切り身を潜らせ、ほんのり塩味を付ける。

「食べてみて」と、坂口さんの妻の智子さん(56)と嫁の史恵さん(25)に勧める。コノシロ、アオリイカ、コチなどが、次々とまな板の上に並ぶ。獲ってから10分と経っていない。新鮮と言えばこれ以上の新鮮さはない。

史恵さんが、おずおずと指に挟んで、コノシロのせごしを口に入れた。つい笑いが込み上げる。「美味しい」と言う他に言葉がない。

船が浮き桟橋に着く頃、悦子さんがアオリイカなどを刺身にしてくれた。菌に跳ね返るようなプリプリとした白身が新鮮だ。

接岸されると鯛正丸の船上で、仁さんが魚の仕分けを始めた。オーナーの坂口さんが持つて来たクーラーではとても入りきらない。出荷用発泡スチロール箱5箱と氷を準備して、持ち帰り用の梱包をする。

熊本から1時間30分ほどかけて来たオーナーの坂口さん一家は、大漁に満足そうだ。

坂口さん一家は、「魚が新鮮な内に近所に配らない」と、急いで帰路に着いた。

恵比須丸では大物カンパチだ！

浮き桟橋ではすでに、熊本県阿蘇市から来た次のオーナー柿元雄司さん(59)と釣り仲間が待ち構えていた。柿元さんたちは、このオーナー制度を担当する漁師の原田司さん(56)と息子の奨さん(28)が案内する恵比須丸で出漁だ。

「オーナーをがっかりさせんごとな、魚が入つとるかなと心配ですがな」と、原田さんは定置網のどの袋を上上げるかに気を配る。袋の底を船べりまで引き上げると、ひときわ大きなカンパチが入っていた。奨さんが、そのカンパチの頭部を鉤棒で一撃して締め、オーナー



「グループの一人として乗船していた川崎史弥くん(10)に「写真撮って貰え」と渡した。

3.5キロほどのカンパチを右手に持って、左手でピース。父親の成也さん(56)とオーナー仲間の緒方裕治さん(40)も一緒になって船上での記念写真だ。「重い！ピチピチする」と、史弥くんは初めての大物を手に自慢顔である。「16キロのブリが入ったこともあったですけど、生け簀に曲がって入っとりましたばい」と、原田さんがひと網オーナー制度の魅力をアピールする。

仕事の延長線上で 地元資源を活かして

「ひと網オーナー制度」の発想は、今年6年目を迎える「ミカンの木オーナー制度」や5年目を迎える「タコつぼオーナー制度」の評判が良く、地元自然资源が、地域の活性化に繋がることが実感できたことによる。

7年前に天草諸島の2市8町が天草市として合併する時、地域の絆を強め経済の活性化

を目指して、52の地区振興会が発足した。その中の大浦地区振興会がオーナー制度の運営母体だ。

オーナー制度の考え方について、天草市有明支所の丸田克治さんは言う。①毎日やっている仕事の延長線上で可能なことをやる。②新たな設備は作らない。つまり特別な投資はしないでおこう。③本物の仕事の中に入ってもらおう。この3点で貫かれている。

このことによって、オーナーに天草の持つ地域資源の本物に触れて、強いインパクトを感じてもらうだけでなく、地元の負担も最小限に抑えることができていくのだ。

鯛正丸の松本仁さんは、「ほとんどのお客さんが喜んで帰っていかすけんね。やって良かったばいなと思うてですね。オーナーから友だちみたいな電話が掛かってきてですたい。熊本じゅうの人と友だちになったごつあつですばい」と、ひと網オーナー制度の手応えを強く感じているようだ。恵比須丸の原田司さんも同じように手応えを感じている。「自分たちの意識が変わってくつとじやなかですかね。お客さん相手ですすね。獲りたての魚を食べて、こぎゃん普段食べとる魚と違ううちやるか、と驚かれますもんね。一番の魅力は鮮度ですけんね」。

今年初めての試みだった「ひと網オーナー制度」は、7月末で終了したが延べ700人を超える人が来島した。ひと網オーナー制度は8月にリニューアルされ、次回は底引き網漁が予定されている。仕掛けの網を海中に投入して、それを約30分かけて引き上げる。ダイナミックな体験が楽しめて、網の中にはマ

ダイがピチピチはねているようだ。

お客さんであるオーナーはもちろん、制度の担い手である漁師も満足した試みは、定着することになるだろう。観光のための作り物ではなく、天草の生活に根ざした本物の地域資源を楽しんでもらうことで、地域発展の展望が見えてきたようだ。(写真・文/芥川仁)



▲有明支所 丸田克治さん
▲左/原田司さん親子
右/松本仁さん夫妻



●大浦地区振興会 ☎0969-54-0548
●天草市有明支所 ☎0969-53-1111



ほたるまつり用に手作りした提灯とライトアップしたエコミュージアム川根。一度提灯が点火しなかったが、すぐ数人の男性が駆けつけてきて直した。結束の良さ、手際の良さに感心

住民の
創意工夫で
②

子供やお年寄りはムラの宝物

ガソリンスタンド マーケット 福祉タクシー

油屋・万屋・車屋を地区で運営

あきたかたしたかみやちようかわね
広島県安芸高田市高宮町川根

地域から商店が消え、J Aのガソリンスタンドも廃止した時、高齢者が地域で生活出来なくなると危惧した川根地区では、川根振興協議会が知恵を出し合ってガソリンスタンド経営に着手、ついでに日用品が買えるマーケットも開店した。住民の拠点「エコミュージアム川根」では子供たちが夕方まで我が家のように遊び、高齢者たちは「笑茶論」会に来て食事やお喋りを楽しむ。「手作り自治区」と注目される川根地区だが、現在に至るまでには住民の地域への愛着、リーダーたちの絆を広げる活動と経営的センスの蓄積があった。

子供やお年寄りが我が家のように集うエコミュージアム川根

安芸高田市旧高宮町は島根県境に接する北部にあり、地区内には19の集落がある。その中で最北部に位置するのが川根地区で、現在人口は549人、238世帯。高齢化率は45・7%（75歳以上が210人）とかなり高い。

しかし街から幾つかの集落を通り山林を抜けて川根に来ると、川沿いの田畑や河川はよく手入れされており、家々が軒を並べる里山風景に、なぜかほっとする。



▶放課後エコミュージアムに集まってくる子供たち。事務所は子供たちの宿題や遊びの場に変身する

賑わいと活気が感じられるのは、そこかしこに住民の姿があるせいだ。

初夏のある日、地区の交流拠点施設「エコミュージアム川根」ではほたるまつりの開幕に向けて、入口に手作りの大提灯が立っていた。午後3時頃には授業を終えた小学生たちが集まってきて、事務所を占拠して宿題をやったり自転車を乗り回している。

この日は広島市の文教大学の女子学生20人が小学校の授業を見学する研修にきており、エコミュージアムに一週間宿泊するため、厨房では職員の女性たちが夕食の準備に追われている。



▲川根小学校の見学を終えて、宮本早苗校長に挨拶する文教大学女子大生たち。教師をめざす学生は毎年川根で研修する



▲学生の中に20歳の誕生日を迎えた学生がいて、ミュージアムが小さいケーキを用意、皆で祝福する
▶引率の徳本達夫先生が大好きでよく訪ねて来る。学生が研修中の時、施設周辺の草刈りを手伝う



ており、年間5000人以上が利用する唯一の施設です。

同施設のレストランで川根振興協議会の辻駒健二会長(67)が待っていてくれた。
若い時広島市に出て企業に就職、結婚して二人の子供がいるが、38歳の時、親の病気を機に自然での生活を見直したいと一家で帰郷した。「帰っても自分の描いていた仕事はなかったこともあり、地区自治会の仕事を手伝うようになった。どんどん変わっていく故郷の様子に何もしないで見ていることが出来なくて」と辻駒さんは言う。
都市育ちの奥さんは、義母をよく介護し看取ってくれたが、田舎の人間関係に悩んだこともあったようだ。田舎で遅く育った子供たちもいまは大学・就職で出て行っている。「たまに来る田舎は良いが、ここで生活するとなるとつまらんと若い人は出ていく。残った親たちは、誰かが家を継いでくれるだろう、帰ってくれるだろうと期待するが、それは叶わない。どこの田舎もそんなパターンです。」

20年以上振興会の仕事をしてきて、ここでどう生きるか、行政任せでなく地域の一人として、個人としてどう生きていくかですね」
住民主体で地域自治をしていこうと振興協議会を設置して各種事業を行ってきた川根地区、そのリーダー役を担ってきたのが辻駒会長。厳しい人を想像していたのだが、野球帽を被ってジーンズ姿で現われた辻駒さんは、親しみやすく気さく。深刻になりやすい話もユーモアを交えながら、さらりと語る。「名刺を持ったことがないんだ。岡田さん頼むよ」といって、エコミュージアム館長の岡田さんと呼んだ。
珈琲を運んできてくれた岡田千里さんが、笑いながら「じゃあ私が代わって」と差し出してくれた名刺には、「安心して暮らせる地域がいい——ecoミュージアム川根」と印刷されていた。
「ここは交流拠点施設として振興会が運営しており、年間5000

岡田館長ら働いてくれる女性たちには頭が上がりんのよ」と辻駒さん。
「開館する時、ここで豆腐一丁作って配達してなんぼ儲かるのと岡田さんに聞いたら、儲かることはありません、私を使ってくれたことが儲けですよと言ったんです。こういう気持ちが大切だと思いたよ」
物を作って売る、食事・宿泊等で利益を上げることも大切だが、子供や老人を大切に、して真心を持って接し、安心して暮らせる地区の拠点施設にする、という発想である。
エコミュージアム川根は平成4年、廃校となった中学校跡地に振興会の企画運営で建設されたもので、交流・宿泊施設の他に、公民館として集会施設と「自然生態博物館」を併設している。ほたるの里で知られるが、オオサンショウウオが棲む葦、川魚が鑑賞できる小川、若鮎の森等、周辺は自然生態公園になっている。
施設では振興協議会職員として5人の女性が働き、他に市派遣の男性が一人勤務している。岡田さんは振興会の副会長でもあるが、



▲エコミュージアム館長の岡田千里さん。高齢者の相談係としても多忙 ▶毎朝小学生の自転車通学に付き添う辻駒健二さん。多忙だがフットワークを軽くして乗り越えている



地域の子供や若いお母さんたちの母親的存在、お年寄りには娘的存在でもあるようだ。

歩いて5、6分のところに川根小学校があり、子供たちが放課後を過ごせる学童保育的役割も担っている。低学年の場合は、親からの依頼を受けると岡田さんらが学校へその子供を迎えに行き、エコミュージアムで親が帰るまで預かっている。だから、夕方まで施設は大賑わい。特にこの日は研修に来た女子大生に会おうと、女の子の姿が多い。

レストランは地区の社交場、食事を楽しむ年配の人も多い。以前から振興協議会では地区の高齢者を対象に月一度「うどん談議」を開いてきたが、参加者の要望に応じて現在月3回「笑茶論」しょうちろん会として開催。300円でうどんと手作り料理を食しながら交流を楽しむ場になっている。みんなの顔を見ると元気になるからと、他地区からの申し込みもあるという。

行政に任せるのではなく 出来ることは自分たちで

川根地区に川根振興協議会が発足したのは昭和47年2月。40年代、高度成長期で人口流出が続く中、47年に未曾有の大洪水で川根地区は壊滅的な被害を受け、陸の孤島と化した。これがさらに過疎化に拍車をかける。地区では災害復興への取り組みと、地域の将来に対する危機感から川根振興協議会を結成して「自分たちで出来ることは自分らで」と広範な活動を始めるようになった。全国的にも初の地域自治組織であった。地域おこしのプランは住民が主体的に立て、行政にはそのアド

バイスや財政的支援をお願いする。特に当時は災害復旧や施設建設費等の助成、新たな地域おこしを協働するかたちをめざした。

平成5年に完成したエコミュージアム川根は、企画段階から振興会が関わった。旧高宮町として建設費に4億円近くかかったが、地区の22の団体からも740万円が集まり、それが自分たちの施設という気持ちにも繋がっている。

エコミュージアムから徒歩10分ほどの街中にタウンセンターと呼ばれる地区がある。ここには川根の新しい顔、「油屋」と呼ばれるガソリンスタンド、「万屋」というマーケット、新装した郵便局、地区が経営する柚子加工センターがある。高齢化地域を支える施設として振興協議会が最も力を入れてきた場所である。平成12年に旧高田郡農協が経営合理化のためマーケットとガソリンスタンドの運営を廃止した。「日常生活に必要な店が消えると高齢者が生活しにくくなる」と危惧した振興協議会が農協と話し合っ、スタンドの営業を引き受けた。また、260戸の全戸が千円ずつ出し合って「ふれあいマーケット」運営委員会を設立、店舗を建設会社が営業してきた（後に倒産し店も閉店）。

平成16年、河川改修工事と旧道の拡張工事を県が行うことになった。それにより移転補償金が出ることになり、旧農協跡地から100m離れた場所にスタンドと併設してマーケットの新店舗を完成することができた。同様に旧市街地にあった郵便局も、郵便局長兼川根振興協議会事務局長である藤本悦志氏の決断で改修移転し、スタンドに隣接する場



▲併設しているマーケット万屋。食品、日用品、お洒落着も揃えている
▶住民の足であり交流の場にもなっているガソリンスタンド





◀ 柚子加工センターの建物

所には柚子加工センターも開設、柚子製品は地域の特産品として売り上げを伸ばしている。

油屋、万屋、車屋の賑わい

翌日は川根小学校で住民検診が行われ、ガソリンスタンド「油屋」、併設の店舗「万屋」は検診を終えて立ち寄り住民で賑わっていた。運営にあたるのは福田拓行さん(63)と信安和見さん(63)。福田さんは航空機会社で働いていたため燃料関係に詳しく、ガソリンスタンドの開設に伴い資格を取った。信安さんは親の面倒を見ようとUターンして15年程になる。二人は車関係のメンテナンスにも詳しく、日常的な点検・修理を行う。ただ専門設備がないため、それ以外の修理はできない。万屋の店員も兼ねているので結構忙しい。

ガソリン代はレギュラーで143円。「ガソリンの原価が高くなったので利益は上がらない。住民はここを利用してくれますが、若い人は三次の安いスタンドへ行ってしまいま



▲包装もお洒落な柚子製品。川根柚子の魅力語る熊高順八さん



▲人気の柚子パウンドケーキを作る女性たち



◀ 柚子皮で作ったスティック

協同組合が行ってきた。川根では折あるごとに柚子の苗木を植樹し、

す。土建業界の不況が影響していますね」と福田さん。冬は灯油の配達で忙しくなり、一缶でも家に届けている。

万屋マーケットは肉・魚・乾物・パン等の食品から農作業服や農具、介護用品まで一通り何でも販売されており、高齢世帯には充分である。商品は生協が扱っているため価格も抑えてあるが、道の駅のように地元産の野菜やお母さん手作りの総菜等がないせいか、今一つ活気がない。私はお洒落なエプロンと作業用帽子を衝動買いしてしまった。いずれUターンした女性が魅力ある店にしてくれることだろう。

油屋にいと住民検診を終えて「車屋」のタクシーで自宅に帰る高齢者の姿が目についた。地区内なら1回100円で利用できる便利な福祉タクシーで、女性ドライバーが送迎していた。

一方隣接する柚子加工センターは、市が8年前に加工施設を建設、加工販売を川根柚子

小学校卒業時にも柚子の苗木を贈るほど。

センターには新鮮な

地元産柚子が運び込まれて、柚子パウンドケーキ、柚子菓子、ジュース等の加工が女性たちの手で行われている。企画営業部長の熊高順八さんは「川根の柚子は品質の良い完熟品、そのため香りと糖度が抜群で、柚子製品は広島等のデパートにもコーナーがあるほど人気を高めており、住民雇用の場としても貢献しています」と言う。

川根小学校では地域に応じて児童たちの自転車通学を許可している。そのため学校では放課後に時々お巡りさんの指導で自転車教室を開催している。自転車大会では県代表として全国大会に出場し、海外へ招待されたこともあるほどの実力校である。しかし朝夕の通学には住民が必ず立ち会うことになっており、辻駒会長も毎朝4時起きして6時には子供たちの通学路に立っている。

そんな子供が生き生きと安心して学ぶ川根だが、三年後には廃校が予定されているとかなる。それだけは避けたいなあ、と辻駒さんはつぶやいた。(文/浅井登美子 写真/小林恵)



- エコミュージアム川根 ☎0826-58-0001
- 川根柚子協同組合 ☎0826-58-0330

▶一回100円で利用できる「車屋」福祉タクシーは大繁盛

住民の
創意工夫で
③

「元気がいい！集落応援プログラム」

和歌山県田辺市たなべし

きめ細かい集落再生活動と市民交流

平成17年に1市4町村の合併により誕生した新田辺市は近畿地方最大の面積を持つ広域合併となったが、旧田辺市を除いて高齢化と過疎化が進んでいる地域。旧市町村の役場は行政局と名称を変え、地区の特性に沿った限界集落対策事業として20年に「元気がいい！集落応援プログラム」を立ち上げた。集落支援員が巡回するほか、市職員が鳥獣害対策ネット張り等をサポートする「職員レンジャー隊」、海辺の街と山間地域を結ぶ市民交流等が始まっている。



▲防獣ネットの前で、龍神行政局産業建設課柳本さんと語る的場さん(龍神地区)

熊野古道と山村集落対策を柱に

平成17年5月、田辺市、龍神村、中辺路町、大塔村、本宮町が合併し、新生田辺市が誕生した。3郡にまたがり総面積は1026.77km²、和歌山県全体の1/4を占めるほどの広大な面積を持つ。合併前人口は田辺市の人口が約7万人だったのに対し、龍神村は4477人、中辺路町、大塔村、本宮町は3300～3800人で、合併時の総人口は

8万5667人(平成24年1月末現在8万713人)になっている。

平成の大合併は全国で新しく558自治体を生んだ。合併状況は中山間地同士が193自治体であるのに対し、都市に中山間地が合併したケースが200自治体。そのため合併により身近にあった役場が遠い市役所になり、地域に活気がなくなったという不満も多い。

田辺市の場合も同様で、特に熊野川の上流にあり熊野詣や熊野本宮大社等の史跡や温泉を有する本宮町が、下流の新宮市ではなく、なぜ遠い場所の田辺市に合併したのかと驚いた県民や観光客が多かったと聞く。結果的に田辺市は、中辺路町から本宮町へ至る世界遺産の熊野古道を有したことになり、大塔の熊野古道も含めて「世界遺産・紀伊山地の霊場と参道詣」の地区、「自然と歴史をいかした新地方都市田辺」としてPR活動に力を入れている。

一方で、旧田辺市の海岸部に都市的地域を形成している以外は中山間地域であるため、市では合併による弊害がないよう、山村集落対策を行政施策の大きな柱として取り組んでいる。

山村振興の窓口に 大塔森林局

その窓口が旧大塔村役場にあ



▲上/昨年の台風の爪痕を残す富田川。急ピッチで復旧工事が進む
下/大塔行政局に掲げられた「森林局」看板の前で、中川さん、広畑さん(右)



るといので訪ねた。田辺駅から車で約30分、東部に位置する大塔地区は中央を滔々たうたうと流れる富田川とその支流沿いに開けた村だが、昨年の台風12号で死傷者を出すほどの大被害を受けた。水害の爪痕をそこかしこに残しながらも、溪谷にある各施設やイベント等も今夏にはほぼ復旧・再開して、清流のムラとして活気を取り戻しつつある。

重厚な役場建物、その入口には「田辺市大塔行政局」の看板と「森林局」の看板が張り出されている。田辺市では「行政局」と「森林局」を設けており、山村振興の総合対策部署が森林局。過疎集落対策の目玉「元気がいい！集落応援プログラム」は、行政局も担当が、森林局が山間地域対策の実行部署として担当し、大塔行政局がその拠点窓口になっている。13名の職員を配し、ここから各行政局や関係機関と連携している。

対応してくれたのは、森林局山村林業課山村振興係の主査中川真吾さんと係長広畑裕文

さん。二人とも大塔で生まれ育ち、家は農業。「合併後、集落の現状について山間集落の住民に聞き取り調査をしました。その結果、イノシシやシカ、サル等の獣害、谷水等を利用しての地区の飲用水の維持管理、集落に隣接する里山の放置、交通手段の確保等が切実な課題として出てきました。平成20年に『元気かい！集落応援プログラム』をスタートさせ、森林局がその業務の本部機能を担っています」と広畑さんから説明があり、パソコンの中から概要の資料を取りだしてくれた。

新たな仕組みとして採用されたのが集落支援員制度である。役場職員と協力して集落を定期的に巡回して生活状況や森林・農地の状況を把握し、それを施策に反映させる役割を担う。都市等の若者を採用する地域おこし協力隊に対して、地域の実情をよく把握している元行政職員、農業委員等が住民ときめ細かに対応していくもので、総務省「過疎地域等の集落対策」助成制度が活用できる。田辺市では各行政局に3〜4名ずつ、現在12名の集落支援員を配して、集落への目配りと、高齢者等への「声かけ」活動を行っている。

龍神支所で働く支援員と「集落応援プログラム」事業により獣害ネットを設置したという丹生ノ川地区を訪ねることにした。

案内していただいた中川主査から、昨年の大災害の状況を聞き、その様子を車窓から垣間見た。数日間にわたる豪雨で、植林整備してある山が各所で崩壊して道路を塞ぎ、土砂は富田川にも流れ込んだ。水位が幹線道路を超えて人家に浸水した地域もあり、職員は一週間近く不眠で対応したという。主要道の復

旧には半年かかり、いままも工事で通行止めになっている場所もある。何よりも、鮎釣りで人気の河川の一部が未だ土砂や流木で容姿を変えていることが痛々しい。田辺市には「企業の森」事業があり、関西の大手企業約30社が森林保全活動と体験・交流会を行っている。それらの森は比較的被害が少なかったが、支援活動に参加してくれているという。

防獣ネット作業には 集落支援員、職員レンジャー隊も協力

「龍神温泉」や高野龍神国定公園等の自然景勝地で知られる旧龍神村。日高川の源流と護摩壇山の麓に開けた地域で、地区面積は25.5km²と一番広い。その日、集落支援員が巡回している丹生ノ川地区は十津川村へ至る山間集落で現在35世帯63名が暮らしている。

集落支援員の岡本保彦さん、谷岡由香子さん、水田雅行さんと集落の女性二人が待っていてくれた。

「昔はなかったことです、最近私が一人暮らしであることを知ってか、小さな柿まで食べようとして鹿や猿が屋根にも登ってくるん



◀市役所職員によるレンジャー隊が、地域の人と水田に防獣ネットを張る作業

です。動物は山にいても里へ出て来ることはなかったのに」と、深瀬よりえさん(75)は言う。的場房子さん(86)の家は家と周りの敷地を最近防獣ネットで張り巡らしてもらった。「自分の食べる分の穀物や野菜は作ってきたが、それも収穫頃になると動物に襲われてしまう。それで役所に頼んでネットをしてもらいました。私が檻の中で安心して暮らしています」と的場さんは笑う。

ネットは、上部は鹿が角を引っ掛けないように、下部にはウサギや鹿が噛み切らないようワイヤー入りにする等の工夫を凝らしていると岡本さんは言う。「それだけで万全というわけではなく、我々が足繁く来て、賑やかにするのが獣害対策には欠かせません」

3人の集落支援員は二人一組で巡回しているが、奥に集落が点在しているため、思うように回れないのが悩み。でも深瀬さんは「定期的に巡回してくれ、何かあればすぐ来てくれる。すごく頼りになっています」と言い、女性支援員の谷岡さんと親しく話を始めた。「准職員並みの待遇を受け、住民にも頼られる存在になりましたので、それこそ土日返上の覚悟で働いています」と水田さん。道路の上の梅畑にもネットが敷かれ、住民の男性が草刈りをしていった。「ネットや畑周辺に雑草を生やさない、山と里の境界を整備することも大事で、これらの活動を行う集落やボランティアには助成制度があります」と中川主査。給水施設の点検や道路の草刈り、防獣ネット等の原材料支給、裏山伐採に関わる補助金等が予算化されてきたため、住民や町会の協力体制も向上しているようだ。

一方、ゼロ予算で行っているのが、市職員によるレンジャー隊。土日や仕事に影響の少ない平日に中山間地へ出かけて、防獣ネット張りや草刈り、古道や道路の簡易復旧作業等をするもので、今まで山間部の事情に疎かった旧田辺市の職員が自主的に始めた。地区の住民と共に取り組めば作業も早く進み、協働で交流が深まり、職員の自己啓発にもなる。現在120名が「職員レンジャー隊」に登録、市民から期待と声援が送られている。

U・タータン女性のアイデアを活かして地域の宝物を加工販売「龍神は〜と」

龍神温泉に近い国道沿いに5年前に開店したログハウス造りの「龍神は〜と」。店には地元産柚子を使ったジャムやゆべし、手作り味噌や醤油、かりんとう等が並び、シンプルだが女性のセンスやアイデアに溢れている。代表の原さださん(52)は大学を出て大阪で結婚したが、家業のプロパンガス販売業を継ぐため26歳で帰郷した。故郷の自然や歴史の素晴らしさに向き合い出した頃、同じようにU・Iターンした女性たちと知り合い、自分たちで事業を起こして村を元気にしようという「龍神は〜と」を設立した。

当初は組み立て式の売店で、地域で作られていた餅や山菜巻き寿司、山菜等を販売したが、商品はすぐ完売するほど大好評。しかし一部の人から営業妨害だ、通行に危険だ等と言われ、村内を転々とした。それが逆に結束を強め、地元の食文化・宝物探しに力を入れるようになったと言う。メンバーは30、40代の女性を中心に30名。昨年から護摩山スカイ



▲「龍神は〜と」の皆さん。左から原さだ代表、レストラン・スタッフ古久保則子さん、寒川和津余副店長、岸真里店長



▶地元の素材を活かして製造販売している調味料、菓子、ゆず製品等
左は「龍神は〜と」と酒造店が共同開発した里いも焼酎「HOIMO」2種と新発売の「じじばば」焼酎

タワーのレストランを指定管理者として運営するようになり、4人の地元青年も働いている。子供を保育園へ迎えに行ったお母さんが戻ってきて「地元の食材を使ってほんまもんを提供したいと皆が夢を語り実現するところ。いい仲間と働けて幸せです」と言う。原さんは、市の農業委員や県の普及指導員、龍神味噌加工組合の代表等もする超多忙な毎日を送っているが、「身の丈に合った方法で、龍神や田辺をPR出来ればと思っています。台風被害等で観光客が減り、売り上げにも影響していますが、地元で雇用の場を作るという方針を貫いていく覚悟です」と語る。今秋には好評の地元産里いも焼酎「HOIMO」に加えて、「じじばば」も発売された。山間部でお年寄りが栽培してきた里いもはとろみが強くて美味だが、さらに切れ味のいいお酒に変身した。乞うご期待！

地区の農業と住民の創造性を結集して 「秋津野ガルテン」「きてら」

古くから秋津野あきづのと言われてきた上秋津地区かみあきづは田辺市南部にある農村地帯だが、平成の初めに600戸だった人口が現在1150戸に激増している田園地帯。温暖な気候に恵まれて80種以上のミカンが取れ、南高梅やスモモの産地でもある。

昭和32年に旧上秋津村が有する財産をすべて地区民に復帰するため「公益社団法人上秋津愛郷会あいきょうかい」を設立、得られた収益はすべて地域公益のために使う画期的な仕組みを作った。自然環境、住環境の良さから市街地から移住してくる人が増えたが、「農業で地域は支えら



▲木造校舎は手入れされて交流施設として活用され、巨樹をシンボルに草花が咲く校庭を回廊してレストランや宿泊施設がある
◀校舎一階廊下で、玉井常貴社長



▲秋津野の旬の柑橘を使った手作りスイーツ工房「バレンシア畑」の皆さん



▲約30種の郷土料理をバイキング形式で提供するレストラン「みかん畑」。900円で食べられるため、11時の開店を待つ客が列をつくる



▲秋津野は柑橘の里。「みかんカレンダー」にして種類を紹介している
▶毎日採れたての野菜や果物が並ぶ「きてら」。下は南高梅を届けてくれた梅農家の原拓生さん

れてきた、農業が衰退すれば地域も衰退する」と見直しを行い、柑橘と梅の複合経営、柑橘の周年収穫をめざした多品目栽培に取り組んできた。平成6年には「地域づくり塾」「秋津野塾」を結成し、すべての住民と各種団体を対象に、都市にはない香り高い農村文化の実現をめざして研修・交流を重ねてきた。

その象徴的施設が、平成11年に地域住民の出資で立ち上げた農産物直売所農業法人(株)「きてら」と、31人が50万円ずつ出資して開設した柑橘の加工施設、「俺ん家ジュース倶楽部」。完熟ミカン100%のジュースは、秋津野の特産品として人気を得ている。

そして平成19年に古い木造校舎を活用した交流施設と、それとマッチしたレストラン・宿泊施設を併設してオープンしたのが「秋津野ガルテン」。レストラン利用者は年間4万人、農業体験や研修事業等を含む有料利用者は年間6万人にもなる人気の施設で、全国から毎日のように見学者も訪れる。

様々な組織があり、歴史と文化、農業を保全する風土があります。それをビジネス化するのが私の仕事でした」と淡々と語る。NITに勤めていたが49歳で辞めて、農家の人と小さな直売所を立ち上げたのが始まりだと言う。上秋津小学校が新校舎に移転すると決まった平成14年に、木造校舎を活用する検討委員会を設け、土地建物を田辺市から(社)上秋津愛郷会が買取り、地域の皆で支えるために出資を募り、株式会社を設立した。19年には事業に反対だった住民も出資、行政も後押ししてくれて、出資者498名、資本金4180万円、の会社として運営を開始。さらに国の助成金等も活用して宿泊棟、レストラン、喫茶室等がオープンした。

現在「きてら」を含めて約70名が働いており、「我が家も株主。配当金も楽しみだけど、ここで働けることが嬉しい」と女性たちも言う。建物も人も眩しいばかりに輝いている。



- 田辺市森林局山村林業課 ☎0739-48-0303
- 龍神は〜と ☎0739-79-8068
<http://18.ocn.ne.jp/ryuheart/>
- 秋津野ガルテン ☎0739-35-1192 <http://agarten.jp>
- きてら ☎0739-36-1177
(文/浅井登美子 写真/小林恵)

住民の
創意工夫で
④

卒業生が歩みはじめた定住生活 協力隊から起業・就業

北海道喜茂別町



▲グリーンアスパラ畑の向うに見える羊蹄山

切りながら勾配を登り切ると、中山峠（標高835m）の道の駅「望羊中山」に達する。ここでの眼福は、もちろん羊蹄山（蝦夷富士）。伸びやかにスカートを広げた優雅な山容に見とれながら名産のじやがいもを使った「あげもち」を楽しむ。ここから、道を下り、じやがいもの花を車窓に見ながら20分程走れば喜茂別の市街地だ。札幌から約1時間半のドライブである。㊦

働いている。また、集落支援活動で培ったネットワークを活用し、コンビニエンスストアの移動販売車で集落を回りながら、将来のパ工房開設を目指している卒業生もいるという。市街地に仕事場をもつ人たちを訪ねた。まず、向かったのが中心街の国道沿いにある「郷の駅ホッとときもべつ」。物販や飲食の店が入居する複合施設で、札幌―函館の最短路トの国道沿いにあるだけに、町民だけでなく町外からの利用客も多い。ドアを開けると「いらっしやい！」と威勢

のよい声が響き渡った。

声の主は「麺屋

誠」の店主・柿崎

敦紀さん。飲食店

で働いた経験を生

かし、協力隊卒業

生の中で、起業を

実現させた一人で

ある。

町役場に行き、総務課の工藤忍さんに地域

おこし協力隊卒業生のその後をうかがった。

「協力隊のうち8人が定住し、3人が起業し

ました。口火を切ったのは、平成24年

3月1日の女性の協力隊員による農産

物加工・販売の株式会社設立です」

協力隊の業務の傍ら、ソバの実を使

った加工食品を開発し、パスタソース

工房を開設した。おすすめは、ソバの

実を肉に見立てたパスタソース。ほか

にも、地場の産物を使った加工品を開

発し、新しいビジネスに挑戦している。

福祉関係の職場を希望していた隊員

は、デイサービス施設で実習を重ね、

ヘルパーの1級資格を取得。喜茂別町

に住み、隣村の特別養護老人ホームで

「高齢者の多い過疎集落に若者の力を！」――

北海道喜茂別町では、平成22年6月、「地域おこ

し協力隊」の隊員を10人受け入れた。高齢者の

多い5つの地区に2人ずつ配置された隊員たち

は、集落での生活支援と地域おこし活動をしな

がら、それぞれが喜茂別町での起業・就業をめ

ざす取り組みを開始した。2年後の平成24年3月、

途中で東日本大震災の復興活動ボランティアに

向った1人を除く9人が修了式に臨み、8人が

町に定住、名実ともに喜茂別の新たな住民とな

ったのである。それから3カ月、夏色に輝く喜

茂別町に彼らの「今」を訪ねた。

羊蹄山麓は農産物の宝庫

札幌から国道230号を道南方面に向かっ
た。定山溪温泉を過ぎ、ハンドルを右に左に



▼新鮮な野菜や果物が並び ▲にぎわう「きもべつ市場」店内



▼喜茂別特産のアスパラガスは缶詰でも有名



▲羊蹄山を望む、道の駅「望羊中山」羊蹄山周辺で収穫されるじやがいもを使った「あげもち」は、B級グルメとしても知られ、揚げたそばからすぐに売り切れる

小さくても一國一城あるじの主

「麺屋誠」はカウンター8席の小さなラーメン店。メニューには「協力隊ラーメン（味噌・塩・醤油）500円」の文字が。「ラーメン屋をやればいいなと思っていた自分が、今ここでラーメンを作っていることに感激しています」。昨年10月、この場所でラーメン店を営んでいた店主の協力に、協力隊事業の業務委託先で、きもべつまちづくりコンソーシアム構想団体である地元のNPOきもべつWAOが運営費を全額負担して、11月に仮営業した。この4月から晴れて本格オープン、



▲「麺屋誠」店主・柿崎敦紀さん。常連さんもできた自慢のチャーシューがのった塩ラーメン



▼看板に残る協力隊の文字と「麺屋誠」の店内



一國一城の主である。「チャーシュー、うまいですよ。自信あるんです」と出してくれたのが塩ラーメン。その言葉どおり、チャーシューは柔らかかに仕上がっているが、スープもいい。「郷の駅は夜8時で閉まってしまいうので、スープづくりの時間が限定され、長時間煮込まなければならぬ動物系のスープは作れません。だからうちは、さまざまな野菜を入れて6時間じっくり煮込んだ野菜のスープにして、ラードでこくを出しています」。なるほど、野菜のだしならではの上品な甘みが、飽きのこない味をかもし出し、最後まで飲み干せる。

経営面を考えると、たいへんなことも多いが、リピーターも増えてきた。せっかくのチャンスが無にしないよう、全身全霊でラーメンに向き合っている。

柿崎さんの店を出てあたりを見回すと、国道沿いに黄色い旗が見える。旗に染め抜かれているのは「地域おこし協力隊卒業 整体のおがわ」の文字。旗に誘われて路地を入ると、同じ旗の立つ二階建ての住宅が見えた。

「いずれは開業したいとは思っていましたが、こんなに早く実現するとは思いませんでした」と話す小川さんは、協力隊として高齢者の生活支援を行う傍ら、延べ200人の町民に無料で施術をしてきた。

なかなか開業する場所が見つからず、市街地に貸家物件が出るのがわかったのが平成24年2月。以後、とんとん拍子に話が進み、4月11日初めてたく開業を迎えた。小川さんは協力隊最年少で、現在26歳。全体の資格が活かせるならばと協力隊に応募した。「協力隊のとき、みなさんによくしていただいたので、

▶一軒家を借りて、住居と整体院にした「整体のおがわ」





▲「整体のおがわ」院長 小川泰樹さん
▶施術は一軒家の和室で

ご恩返しの意味でも開業するなら喜茂別だと決めていました。これからもずっとここで仕事ができればと思っています。開業を後押ししてくれたのは、喜茂別の人たちの温かさだった。

町の広報活動の一翼を担う

工藤大文^{ひろふみ}さんは、同じく協力隊出身の安田純子さんとともに、NPO法人きもべつWAOに就職し、町の広報活動の一翼を担っている。

仕事場は町の農業環境改善センター。相棒の安田さんは「レディース検診」の体験取材のため札幌に出かけていて、この日はあいにく不在。安田さんは主に「広報きもべつ」の

編集を担当している。「基本的に安田さんが外で情報収集をし、ぼくがシステムで情報発信をするという役割分担です」と話す工藤さんは、元コンピュータプログラマー。

「町のIP電話のシステムを管理しているため、室内でパソコンに向かうことが多いのですが、協力隊のときのようない外回りの仕事、けっこう気に入っていただけです」と工藤さん。プログラマーの仕事辞めて、何か新しいことをやりたいと思っていたとき、転職サイトで喜茂別の地域おこし協力隊の募集を見て応募した。

喜茂別での生活の中で、自然と関わる仕事ができないかと考えた。しかし、今までに自然ガイドなどの経験をしたこともない。迷っているうちに、協力隊終了間際、安田さんから町の広報の仕事をやらないかと誘われた。「喜茂別は自然も豊かだし、住みやすい。仕事さえあれば、ここで生活していきたいと思っています」

工藤さんは今、自然をキーワードとした喜茂別のまちおこしのイメージも模索中だ。

定住の決め手は、町と人の温かさ

10人の地域おこし協力隊を受け入れた町。任期満了後も、ほとんどが町内に残った協力隊。協力隊の活動は全国で行われているが、その内容が秀逸であると、内閣府から視察がきた。「町の支援や、隊員を受け入れる土壌が町にあったことが定住に結びついたのではないか」というのが視察の総括である。

町は、協力隊員が最終的に起業や就業がで



▲IP電話の音声を入力する
▶まちづくり編集工
房の工藤大文さん

きるように助言・指導を行うシステムをつくった。協力隊が抱える起業や就業の悩みに寄り添った親身の助言や指導は、彼らの大きな励みになったであろう。札幌に近いという地の利も、時に繁華街を懐かしむ気持ちを慰めただけだ。

しかし、それ以上に彼らの心を動かしたのは、町の人たちの協力隊に向けられた温かなまなざしに違いない。

当初は、協力隊の出現に戸惑いを覚える住民もいたが、協力隊の誠実で地道な活動が信頼関係を着実に築いていった。その信頼の絆があつてこそ、起業・就業への支援につながった。

柿崎さんの言葉が思い返された。「店を開くときには、いろいろな人が動いて協力してくれました。そうでなければ、ここに住もうなんて考えませんよ」

温かな人の心なくして、地域も人も育たない。

(文)村上憲加 写真/満田美樹

- 喜茂別町総務課企画室 ☎0136-33-2211
- 麺屋誠 ☎0136-55-5130(郷の駅)
<http://menyamakoto.jimdo.com/>
- 整体のおがわ ☎0136-55-8811
<http://seitainoogawa.jimdo.com/>
- まちづくり編集工房 ☎0136-33-3370



およそ300年の歴史を誇る鹿児島県指宿市の「砂蒸し風呂」は、温泉好きならずとも一度は試してみたい名物温泉である。その源泉となっているのが、海岸からほど近い内陸部で、90度もある温泉が多数自噴している指宿温泉群。この豊富な地元資源を利用した省エネ温室で、観葉植物を栽培しているグリーンファーム指宿生産組合は、約60軒の農家が加入し、年間25億円の販売実績を上げている。

自然エネルギーが
地域の活性化

豊富な温泉熱を利用して 観葉植物栽培日本一

いぶすきし
●鹿児島県指宿市

グリーンファーム 指宿生産組合の強み

指宿市の市街地に近いグリーンファーム指宿生産組合の農場には、100坪のハウス40棟が建ち並ぶ。それらのビニールハウス内部を見ると、直径10センチほどのパイプが2本、観葉植物の葉の隙間から見える。冬場には、このパイプの取り入れ口で約60度の温泉を通すが、最後にパイプから排出される際の温泉温度は30度近くまで下がっている。その差の30度分が、発散される熱エネルギーとしてハウスの室温を温める仕掛けなのだ。

「源泉の所有者に、農家一軒当たり年80万円の温泉使用料を払っているが、重油ボイラーに比べれば5分の1でしょう。もう一つ、指宿温泉の良いところは、コアと呼ぶ温泉の成分が柔くて固まらないので、パイプの掃除がしやすいので助かります」

グリーンファーム指宿生産組合の代



▲ハウスで栽培しているウンペラータの前で下湯湯正弘さん

表を務める下湯湯正弘さん(58)の言葉に、指宿市の自然の恵みである「温泉」に感謝の気持ちを抱く。

指宿市ならではの強みが、もう一つある。一時期、幻の生物イッシーの話題で知られた池田湖が市内にある。南薩畑灌漑事業として、この池田湖の水を引いた農業用水を、自動灌水として使えることだ。農業用水が自由に使えるのは、観葉植物の産地競争相手の沖縄に対して、一歩も二歩も有利な条件となった。農家には、一石三鳥の地元資源が存在しているという訳だ。

建ち並ぶハウスを歩くと、各農家のハウスで、微妙に栽培品種が異なっている。その背景には、現在、グリーンファーム指宿生産組合が抱えている課題があった。

多様化、ブランド化等に対応して

観葉植物が産業として伸びた黎明期は、病院やオフィスなど業務用の需要が主力だったが、ここ10年ほどは家庭用の中鉢、小鉢を増やし、品種を多様化させる流れが出ている。特に、最近の傾向として、ネット販売業者へ

▼島津の殿様が湯治していた殿様湯の跡



▼砂浜の下まで来ている温泉の熱を利用した指宿名物砂蒸し風呂



▼温泉を貯めるタンク



▼温室の中に温泉を通すパイプ



▼エアブームで空気を動かす



▼温室にびっしりと観葉植物



の卸販売が増えている。観葉植物の産地としてブランド化することも大切だが、それと同時に、個々の農家のブランド化が急がれているのだ。

「ネット販売は鍛えられますよね。消費者と直に繋がっているの、リピート率を高めようとする、すばやい対応が求められます。これまでの農家の生産サイクルとは違いますから」

下湯湯さんは、これまでのような農家感覚ではスピードに対応できないと言う。時代の変化に対応するのは農家の努力。その基礎を支えるのが、指宿市の省コスト天然資源なのだ。その努力の成果が、農家のハウスごとに、

栽培品種が異なっている結果となっている。下湯湯さんの農場では、消費者へ自らの植物園の特徴を伝えるため、販売する一本一本の植物にラベルを付けて出荷している。

「クルシア・ロゼア」に付けられたラベルを見ると、下湯湯植物園のキャッチコピー「萌える緑の風」がまず目に入る。その他、MPS（花き産業総合認証）のマークが、品質を保証しますと宣言している。MPSは、オランダ発祥の花き業界における認証システムのこと、生産や流通上の環境負荷の低減や鮮度と品質の管理、社会的な責任などの取り組みを認証している。ラベルの裏には、生産地と培養土、管理方法のポイントが素人にも分かりやすく書かれてある。ラベル一枚に、相当の情報量だ。

下湯湯植物園のハウスで、迫義久さん（41）が、ウンペラータの剪定をしていた。剪定の仕事を始めて10年になる。

「出来上がりを想像しながら、形を整え、ポリウムを付けるのが仕事。私は素人から始めたので、最初はNHKの「趣味の園芸」などを見ていましたね。やっているうちに植物を好きになって興味も湧いてきて。重労働ですよ。

①同じ生産組合の中でも、農家による経営格差が出ている。昨年の東日本大震災によって、観葉植物業界はダメージを受けたが、今年には回復基調にある。しかし、その流れに乗れない農家が出ている現状がある。

②生産品種が売れ筋に偏る傾向があり、その傾向が強くなると値崩れに繋がる。それを避けるためには、各農家もつと独自性を出す必要がある。

一番は、夏の暑さに耐えられるかどうかですね」

このように農家は努力を積み重ねながらも、下湯湯さんは、グリーンファーム指宿生産組合の課題として、次の3点を挙げた。



▲温室の前に中国製鉢



▲ウンペラータの剪定をする迫さん
▼福留壮一さん 二代目組合長

- グリーンファーム指宿生産組合 ☎0993-22-6281
- 下温湯観葉植物園 ☎0993-22-2833
- 室屋植物園 ☎0993-35-3050

指宿市で源泉の多い温湯地区を歩くと、火傷しそうな熱い温泉が自噴している。一年中、温泉が噴き出して小川に流れ込んでいるのだ。

35年前から始まった 地元資源活用の実績

③基本は農業なので、鉢の中の品質がしっかりと保たれていることが大切だ。
下温湯代表が挙げた課題は、経営力、欲求、技術という農家個々の課題と生産組合という組織のチームワークとのバランスを、どのように折り合いを付けるかという課題に聞こえた。組織の長としての悩みが伝わってくる。



▲本文には登場しないが、温泉以外の地元資源の利用法として、指宿市山川町の室屋植物園では地熱蒸気を利用した温室で胡蝶蘭の栽培が行われていた。胡蝶蘭に囲まれた室屋植物園の家族



▲室屋植物園の地熱蒸気取り入れ口

▼「スメ」と呼ばれる指宿市山川町鯉地区に伝わる地熱蒸気を利用した蒸し器



「指宿では、石清水いおしずみが温泉なんです。有り難いと言え、有り難い」と、下温湯さんが苦笑いする。

市内西方二月田には、天保2年（1831）に島津斎興公が長井ノ湯からこの地に移築した湯権現様が祀られ、その脇には島津の殿様が湯治に使っていた殿様湯跡が残されている。指宿温泉の歴史の奥深さが偲ばれる。殿様湯跡の隣には現在も、殿様湯という名の公衆温泉浴場が営業していて、駐車場は車で一杯だった。

指宿市で観葉植物栽培に温泉を利用する歴史は、ここ西方地区から2キロ離れた弥次ヶ湯地区までパイプを敷設して、昭和52年に始まっている。最初は、ハワイアンムードを売りにしたワシントンニアパームやカナリエンスなどの観葉植物を主体にしながらも、一口ナスなどの野菜も作っていたようだ。地元資源活用は、すでに35年前から始まっていたのだ。現在も、ハウス暖房の源泉は同じで、地下からモーターポンプで温泉を汲み上げ、グリ

ーンファーム農場の大型タンクへ送湯し、そこから各農家のハウスへ配湯している。

産地間競争が激しいとは言え、指宿市の観葉植物が全国でも注目を集めている事実は揺るがない。グリーンファーム指宿生産組合では、毎年2月と9月に観葉植物フェアを行い、全国から取引先50社ほどが集まってくる。需要が減少気味だった業務用も、省エネの流れに沿ってオフィスの環境改善の流れが出ている。再び、業務用の需要が伸びる要素となりそう。個人需要は、インターネットを通じた新しい販売ルートの伸びが期待できる。

業務用、個人、いずれの消費者も、品種やデザインが多彩で、スピード感のある栽培を求めている。指宿市の観葉植物業界が産地間競争を勝ち抜くには、恵まれた天然資源の有利さを活かした経営感覚が鍵となりそう。

（写真・文／芥川仁）



▲オリジナルブレンドの土で植え込み
▶JA 指宿観光部会の出荷風景



自然エネルギーが地域の活性化

平成11年、四国山地の山嶺に広がる四国カルストに2基の巨大風車が出現した。標高1300mという日本で最高所に建設された風力発電所である。設置者は高知県檮原町。南国土佐にありながら、冬は雪に閉ざされる山里だが、「自然との共生なくして次代を築くことはできない」と、風力、小水力、太陽光を活用したエネルギーの確保に挑戦、多面的な循環型地域づくりに取り組み、平成21年1月、中国・四国地方で唯一「環境モデル都市」に認定された。



▲四国カルストに設置された風力発電所。風車はデンマーク製で出力600kWが2基。年間平均約2,900MWhの電力を生み出す

自然と向き合い、森・水・風を活用する 環境モデル都市・檮原

ゆすはらちよう
高知県 檮原町

目指すは2050年
エネルギー自給率100%

山深い檮原町のメインストリートに、クジラの風車が回っている。「かぜながすクジラ」と名付けられた町のモニユメントである。風車の羽根を回すのは、小水力発電の電力。町を流れる檮原川の水を利用して、このクジラの動きが



▲6mの落差を利用した小水力発電所

「昭和43年に檮原中学校の用地確保のため、蛇行する川のショートカット工事を行ったのですが、そのときにできた6mの水の落差を利用して、平成19年に小水力発電所を建設、平成21年に完成しました。発電出力は53kWですが、昼間は学校、夜は街灯に利用され、余剰電力は四国電力に売電し、町の貴重な一般財源になっています」と那須さん。

しかし、冒頭に紹介した風力発電で得た売電益は、「風ぐるま環境基金」として積み立てられ、森林の保全整備や町内の太陽光発電の普及に活用されている。その額、年間平均約



▲小水力発電の電気は街路灯に活用

止まれば、取水口にゴミがたまったり、機械にトラブルが生じたということなので、担当者が現場に駆けつけます」と説明してくれたのは、檮原町の環境モデル都市推進室の那須俊男さん。室長の大崎光雄さんと共に町のエネルギー施策を一手に引き受ける。その守備範囲は、風力発電や小水力発電から、木質ペレット事業の推進、太陽光発電の普及や廃油の再利用化の検討まで及ぶ。八面六臂の毎日である。

3500万円。森林整備に間伐作業は欠かせない。森林所有者が間伐をすると基金から1ha当たり10万円が交付される。これにより10年間で民有林の70%の保育間伐が完了した。間伐された材は、町と森林組合等が出資している「ゆすはらペレット(株)」が1t当たり4000円で買い取り、年間1125tの木質ペレットに加工され、町の各施設の温水ボイラーや冷暖房機、県内外の施設に供給している。



▲町のエネルギー施策を網羅した橋原町総合庁舎



▼モデル住宅内に設置されたペレットストーブ



◀環境モデル住宅。標高200mと800mの2カ所に建てられ、慶応義塾大学の研究施設にもなっている。

自然と共生してきた歴史が生み出したエネルギー思想

平成18年、町産材のスギをふんだんに使った純木造の橋原町総合庁舎が建てられた。太陽光発電や太陽熱・地中熱を利用した空調システム、外気を効果的に取り入れられるよう、外壁をスライディングドアにして前面開放す

る。基金は、住民たちが太陽光発電やペレットストーブを設置する際の補助金としても使われ、平成24年3月現在までに、1111戸の一般住宅にも太陽光パネルが取り付けられた。「町では、2050年までにCO₂の70%削減、エネルギー自給率を現在の28・5%から100%にするため、今後、風車を40基に増設する計画を進めています」。

るシステムなど、新エネルギー、省エネルギー設備を駆使しており、町の環境エネルギー施策の象徴ともいえるべき建物である。平成22年にはCO₂削減効果の高い環境モデル住宅を2棟建設した。1泊2000円で体験宿泊ができる。「町の人たちに環境や健康にやさしい住宅の住み心地を体感してもらおうと考えていましたが、U・Iターン希望者や帰省にも利用され、利用者の70%は県外の人たちです」。

最近では、実際に体験したり見学して、エコや自然エネルギーへの理解を深めようという人たちが多くと話す那須さん。橋原町の自然再生エネルギー視察ツアーを企画したところ、坂本龍馬に扮する観光ボランテアもうれしい悲鳴を上げるほどの盛況ぶりだという。エネルギー施策が観光客を呼び寄せるといふ一昔前の日本では考えられない奇観が橋原町に現出している。

昨年度の橋原町への行政視察が約200団体1100人。今年度はマスコミの取材が殺到している。10年余の施策と実績が評価され、

今や自然再生エネルギー政策といえば真っ先に「橋原町」の名が挙がる。

しかし、この実績はたかだか10年余の施策が生み出したものではない。それを生み出したものは、「環境」「エコロジー」という言葉すらない時代から連綿と受け継いできた「自然との共生」の思想であり、施政を掌るトップから町民の一人ひとりまで、自然に寄り添って生き、「森」や「水」を町の財産として守り続けてきた歴史である。昭和の初めに、現在の四国電力橋原川発電所の前身である「村宮」の水力発電所を建設した事実が、その深々とした歴史を物語る。

今年7月から、「再生可能エネルギーの固定価格買い取り制度」がスタートし、電気事業に参入する事業者や自治体も多い。しかし、そこに自然と向き合い、自然から学びつつ、共に生きていく覚悟がなければ、計画の実現は難しいのではないだろうか。自然からエネルギーを求めようとするとき、そこに自然に対する骨太の思想、自然全体を尊重する愛がなければならぬ。橋原町の取り組みは、その大切さを教えてくれる。

(文/村上憲加)

写真提供/橋原町環境モデル都市推進室



▲耕して天に至る神在居(かんざいこ)の千枚田

女子大OB生たちの

田舎暮らしと地域おこし

茨城県常陸太田市 里美・金砂郷

常陸太田市里美地区では、例年清泉女子大学生の8泊9日にわたるフィールドワークを受け入れてきたのが縁で、昨年より同大学卒業生が「地域おこし協力隊」として移住、5人の女性が地域で暮らしながら、さまざまな活動に取り組んでいる。若い女性の感性を活かした地域のお宝発掘と市内外へ発信する活動に期待が寄せられている。

里山の情緒あふれる里美地区

常陸太田市里美地区は茨城県の最北部に位置し、三鉢山を超えると福島県に至る。市の中央部を里川が流れ、川に沿って国道



▲小林農園でサクランボ狩り体験。左より石川、長島、小林、笹川さん

349号が走り、その両側に田畑や家並みが広がっている。西部には里美を代表する鍋足山(529m)、東部には富士山、御殿山、古観音山等の山々が連なり、幾つもの支流が里川に注いでいる。変化に富んだ地形と豊かな水源が沢山の滝を作り、市では27の滝を「里川紀行・滝めぐり」として紹介している。また里美は、古くから水戸と奥州を結ぶ街道としても賑わい、旧道沿いには古い民家も残っている。常陸の豪族佐竹氏の本拠地として

470年栄え、江戸時代には徳川光圀公が晩年過ごした「西山荘」があり、観光施設として一般公開している。

この魅力的な里山に、10年前から清泉女子大学(品川区)地球市民学科の学生たちがフィールドワークで訪れるようになった。里美の自然に触れ、農家に泊って農作業を体験する8泊9日のコースで、フィールドワークを通じて里美に時々来訪したり、農家と交流する学生が増えてきた。

市では総務省が推進している「地域おこし協力隊」制度を活用して昨年より清泉女子大OB生を中心に募集した。昨年4月に里美地

区の協力隊員として3名、今年4月に金砂郷地区隊員として2名を採用、いま5人の協力隊員が地域おこしの一員として活躍している。

田舎が欲しい、田舎暮らしをしたい

里美地区の中央部にある里美支所、その一室に地域おこし協力隊員の詰所(事務所)がある。午前11時の約束で訪ねると、5人の女性が仕事を調整して集まってきてくれた。さすが若い女性たち、支所の雰囲気がかこだけ眩しく輝いて見える。

5人は「Relier」(ルリエ)というチーム名をつけて活動し、ブログでも『Relierの毎日』というタイトルで発信している。フランス語で「つなぐ」「むすぶ」という意味。

里美地区隊員の長島由佳さん(26)は東京出身、清泉女子大を卒業したあと品川にある大手旅行会社に3年間勤務後、里美の地域おこし協力隊に応募した。「両親とも都会暮らし

なので田舎がなく田舎暮らしの経験がありません。会社ではトータルな仕事は無理ですが、ここでは1から10まで自分で考えて実施できます。迷わず協力隊に応募しました」と言う。

里美地区の3人はそれぞれ空き家を借りて住み、「マイ畑」で家庭菜園も楽しんでいる。

笹川貴吏子さん(24)は青森県おいらせ町出



▲里美支所内にある協力隊員の部屋。パソコンから作業着までとところ狭しと並び、中央が担当窓口・企画課の山川さん



笹川貴史子さん



石川明紗さん



長島由佳さん

▲来市2年目、里美で働く協力隊員
▶今年から金砂郷地区に移住してきた2名



白石百合乃さん



野寄真衣さん

家が出店する朝市に常陸太田市の乾燥マイタケや農産物を販売して好評だった。しかし東京に出荷するほど大量生産している農産物が少ないのが、今後の課題でもあるようだ。

金砂郷地区からは野寄さんと白石さんが来てくれた。

野寄真衣さん(26)は、大学を一時休学して今年卒業、2年の時フィールドワークで来たのが縁で、農家の人とは手紙のやり取りをしてきた。札幌市出身。

「自分のふるさとと言える場所が欲しいと応募しました。金砂郷は常陸秋蕎麦の発祥地で、蕎麦の栽培から加工までこだわっている。そのPRができればと思います、蕎麦打ちも勉強中で、自分の食べる分は打てるようになりました」

白石百合乃さん(23)はさいたま市浦和出身。愛知県豊根村のフィールドワークに参加したりインドに旅する等、各地へ出かけてきた。

「田舎の人達の間関係のすばらしさを学びました。趣味の写真をいかして、自然や農家の暮らし等を紹介出来ればと思います」
我々の取材中も意欲的に写真を撮り続けていた。

若い女性の感性を 地域おこしに反映する

常陸太田市では総務省が支援する「地域おこし協力隊」制度を活用して5名を採用しているが、地域からの要望があり、今後も追加募集する予定だと言う。

同制度は、都市住民を自治体が受け入れて、地域おこし活動の支援や農林漁業の応援、住民の生活支援等に従事してもらい、定住・定着を図りながら地域の活性化に当たってもらう制度で、期間は概ね1年以上3年以内。総務省が隊員一人につき200万円+活動費150万円を上限に支援する。平成23年には147自治体で413名が隊員として活動しており、過疎と高齢化で悩む地域にとっては活性化の大きな施策になっている。

常陸太田市の場合は、農作業や雪下ろし等の活動ではなく、若い女性の感性を地域おこしに生かしたいと考えた。担当窓口の常陸太田市政策企画部企画課山川洋史主事は、「里美では10数年前から清泉女子大学の先生方と交流、移住して農業をしている先生もいます。その関係で夏には地球市民学科の生徒15名程が来て農家に泊って仕事を手伝い、その後も住民と交流しています。そのため協力隊員は当初、一般市民ではなく同大学卒業生から募集することにしました。学校が募集してくれた希望者に面談し採用決定は市が行いました。採用した5人は都市で暮らし、里美に関心を持ち、田舎暮らしにも意欲的でした」

その効果について山川さんは「若い女性が来てくれて、イベント等への参加者が増えたと思います。今までは仕事等で参加が少なかった方

身、昨年大学を卒業して協力隊員としてやってきた。親は自営業のため、農業経験はなかった。「地域資源の発掘では持方集落がこんなに芋を栽培していて、とても美味しい刺身こんにやくを作っている。そのパッケージデザインを手がけました。直売所でも販売し、よく売れるようになったと言われます。地域の人と話すのが楽しい、少しでも役に立ちたいです」

石川明紗さん(24)はつくば市の出身で、笹川さんと同様に大卒と同時にやってきた。同じ茨城県にいながら里美のことを全く知らなかったと石川さんは言う。

メインの仕事は情報発信、ブログで里美の商品や情報を東京や大学関係者に紹介している。下北沢(世田谷区)のママンカという農



◀自慢の「マイ畑」に立つ長島さん(左)と、家主の豊田さんと語る長島、白石さん



▲里美に移住して60種の無農薬野菜を栽培する伊藤夫妻

全員が出勤して、その日の予定や作業を確認し、ブログの点検と発信作業。それからクルマに分乗して各地へ出かけていく。

庭には各人の小型乗用車が並んでいた。マイカーは自己負担だが、ガソリン代と住居にしている空き家等の家賃は市が支払ってくれる。

農家の意識が変わってきた

の参加が増えた感じですが。住民も地域について関心を高めてきたように感じます」と言う。農耕地がそれほど広くない里美地区では、農家が人手不足で困っているというケースは少ない。とあって、企業等の雇用の場は少ないので若者は水戸市や日立市等へ勤めるが、車で1時間はかかるので、結局地域を出てしまふようだ。

「住むのには最高にいい里山。でも若い人には勤め先がなく物足りないのかもしれない」「いい温泉もあるし景勝地もあるけれど、観光地としては中途半端」と隊員たちも言う。そんな里美で、地域おこし協力隊に求められる役割は、地域資源の発掘とそれを内外にPRし、里美や金砂郷を都市住民の交流の場にしていくこと。

支所一室に協力隊の事務所があり、パソコンや資料、野外活動用の作業服等がところ狭しと置かれていた。朝8時半には原則として

支所の近くに、美味しい蕎麦や地元の総菜を食べさせてくれるレストランがあった。リンゴや梨、サクランボ、蕎麦を栽培する農家で、レストランはリンゴ園の先にある。観光農業に取り組みご主人の小林信房さんは地域住民のリーダー的存在で、隊員女子にとっては何かと頼りになるお父さんの存在。また蕎麦を運んできた奥さんも「皆、ちゃんと食べるかい」と声をかけ、母親のようでもある。奥まったところにあるハウスでは、完熟したサクランボがたわに実をつけ、サクランボ狩り観光がスタートしたところ。赤い実を収穫しながら小林さんは、「協力隊がきて農家の意識も変わったね。いままで自家用程度に作ってきた野菜を地域の特産品としてもっと一生懸命栽培しよう、伝統食品をアピールしよう、里美にあるお宝を発掘しようなど、地域を見直し新しい取り組みをする意欲が出て

きました」と言う。

最高に甘くて美味しいサクランボ園の、手前の畑では蕎麦を栽培しており、間もなく花をつけようとしている。一日中いたくなるような美しい観光農園だ。別れ際に小林さんは「うちのサクランボ狩りもPRしてよ」と石川さん等に注文を出していた。

里美に移住して60種の野菜栽培 伊藤夫妻

常陸太田市と清泉女子大学の交流を結びつけたのが里美に移住して農業をする伊藤達男非常勤講師。月2、3回品川の清泉女子大へ講義にいく以外は、奥さんの幸子さんと農業に取り組んでいる。若い頃から青年海外協力隊でラオス、NGO（民間の支援団体）でエチオピア、ベトナム等に農業指導に行っていた筋金入りのファーマー夫妻で、日本で農業をしたいと50歳の時、里美に移住してきた。授業ではフィールドワークを担当し、里美へ学生が来た時は農家民泊として生徒を受け入れている。

「見晴らしの良い場所に家と農作業用の納屋も建てました。いまあちこち10カ所に農地を借りて、年間60種の農作物を栽培しています」

休耕地の活用にも役立っているようだ。農業ゼロ、化学肥料ゼロで露地栽培する野菜は、安全で昔ながらの野趣に富んだ味だと人気で、週2回収穫して30人の会員に発送している。有機栽培農家5人と協力して学校給食用にも野菜を提供す



◀自然との共生をめざす伊藤家は野草・昆虫の宝庫でもある(右)伊藤先生から無農薬野菜を分けてもらう隊員たち

るようになった。田圃も2反5畝借りて米を作り、野菜はレタス、トマト、ニンジン、キヤベツ、大根、葉物等々。冬も防寒用にネットをすることはあるが、原則として寒風の中で育てる。「冬の野菜は見た目は悪いが、甘みが出てきてとても美味しいですよ」と幸子さん。

しかし、こんな里にも猪やハクビシンが出て、収穫の頃に食べられてしまう。トウモロコシ、カボチャ、枝豆は電気柵やネットをして防備するという。「今はもつと大変、毎日害虫取りと雑草取りに追われている」と、夫妻は楽しそうに語る。

家の周りには山野草が生い茂り、花を求めて蜂や蝶が飛びまわっている。5人の女性たちもここでは我が家に帰ってきたように寛ろいだ様子である。

地域おこし協力隊について、伊藤さんは「せっかくならんだ。永住する覚悟をもって、働いてみて欲しいね」と語った。

伊藤さんの家を出て金砂郷地区へ向かう途中、長島さんの住む家と「マイ畑」を拝見させてもらうことにした。こちらの要望に素早く対応してくれる若い女性たちのフットワークの良さに感心しながら、クルマの後を追いかけた。

10分ほどで長島さんが借りている豊田紀雄さんの家に着いた。手入れの行き届いた庭の中に潇洒な2階建ての屋敷があり、長島さんは一階の離れを借りている。道路の先に長島さんの「マイ畑」があった。

三種類のジャガイモが花を咲かせ、大根、チンゲン菜、トマト等が育っている。マルチ

で植えたトマトの苗は柵を作って手入れしている。「本格的ですね」と言うと、「家主さんが手伝ってくれるんです」と長島さん。

そこへご主人の豊田さんが現れ「今は女房と二人暮らしなので、こんな若い女性が下宿してくれ、娘が出来たようですよ」と語っていた。

常陸秋そばの名産地、 金砂郷赤土地区

今年から野寄、白石さんの協力隊員を迎えた旧金砂郷町赤土地区。常陸太田市の西部山間地で、約140戸が暮らしている。地名通りの赤い土壌は蕎麦栽培に適しており、「常陸秋そば」の発祥地として知られている。坂道を登って行くとき突き当たりにJAが経営する蕎麦処「そば工房」の建物があった。

働いているのは蕎麦打ち10数年のキャリアを持つ地元のお母さん達。毎日使う分だけの蕎麦を石臼で挽いて、それを手打ちして茹で天然水で洗い、季節の野菜天ぷら等を添えて提供するもので、蕎麦通が遠くから通って来る人気の店だと言う。「この蕎麦を食べると、東京で食べる蕎麦は味がなくて物足りない」と野寄さんも「常陸秋そば」を絶賛する。

二人は店の空き時間を利用して、蕎麦打ちを体験中で、店の女性は「一生懸命勉強しており、じきに一人前になりますよ。二人が来てくれて、地区が賑やかに明るくなりました」と言う。

売店では冷蔵保存した蕎麦粉、蕎麦で作ったせんべいや和菓子、蕎麦



茶等が売られていて、人気がある。「まだ来てから3カ月、里美もいいけれど金砂郷は巨樹と史跡が多い魅力的な地区です。特に蕎麦の収穫後に土作り用に育てたクリムソクローパーが、5月頃に一面赤い花が咲かせ、その美しさに感動しました。これからいろいろ学んで、都市の人に発信していきたいと思います」と二人は語っていた。

二人の住まいは、体験宿泊用に建てられたケビンで、野鳥のさえずりに目覚める日々を送っている。

後日ブログを見ると、「マイ畑」のトマトが上手に出来た、子供たちとカブトムシ見学に山歩きした、夏祭りの準備をしている等の情報が沢山書かれていた。夏休みになり5人は多忙を極めているようだ。

(文/浅井登美子
写真/小林恵)



◀金砂郷「そば工房」の皆さん(左)と蕎麦打ちの勉強をする野寄・白石さん(上) そば工房 ☎0294-76-9000



▲玄関ホールの作品展示スペース

日本の最北端稚内に程近い上川地方に位置する音威子府村。人口は853人（平成24年6月）、北海道でいちばん小さな村である。コンビニエンスストアは1軒だけ。ゲームセンターもカラオケボックスもないが、山や森、ゆったりと流れる天塩川——あふれるばかりの自然がある。そんな自然に包まれて工芸や美術を学ぶ高校生たちがいた。北海道おといねっぶ美術工芸高等学校の118人。寮生活をしながら学び、心を磨き、創作に取り組む密度の濃い毎日を過ごしている。

若者の感性を活かす

北海道一小さい村の、日本一熱い学舎
 村立「北海道おといねっぶ美術工芸学校」
おといねっぶむら
 北海道音威子府村

密度の濃い3年間の高校生活

7月、学校祭の準備真っただ中のおといねっぶ美術工芸高校を訪ねた。校舎に入っつぐ、玄関前のホールに展示された作品群が目飛び込んできた。昨年度の卒業生の卒業制作だが、高校生の作品とは思えないほどの完成度である。「在校生はデザインに悩んだり



▲かんなを研ぐ

すると、ホールに来ては先輩の作品に学んでいます」と話すのは教頭の高橋雅彦先生。生徒たちの名前、出身、家族構成、すべてが頭に入っている。「1学年1クラス40人、教職員は18人なので、学校全体が家族のようなものです」。玄関ホールの卒業制作は、次の卒業制作が完成した段階で教師たちの手で梱包され、各生徒のもとへと送られる。「親御さんたちは、作品に子供の成長を見てとって、感激されるようです」

生徒たちから掛けられる「こんにちは」という挨拶がすがすがしい。少し緊張している様子の1年生。上級生になると顔つきもすっかりしてくる。「皆、目的をもって入学してきていますから、わき目



▲1年生はまず道具の扱い方から



▲機械の扱い方の指導を受ける



▲のこぎりの使い方を訓練した成果が、木材に入られた細かな切込み



◀1年生の時の工芸課題「動物オモチャ」を手に(2年生)



◀塀も門も垣根もない、村にとけこんだ校舎

もふらずに課題に取り組んでいます」と教頭先生。
真剣さと緊張感みなぎる実習時間が終わると、全校あげての学校祭の準備が待っている。サボる者など一人もない。全員が一つの方向を向いて集中している。
夕方、三々五々寮に戻り、夕食をとると一目散に学校へと戻る生徒たち。午後8時まで、創作活動に向かうことが許されている。
授業や部活動に加えて、高大連携事業として、年8回東海大学の教授の授業や大学での研修、姉妹高校のスウェーデン・レクサンド高校とは相互交流を実施しており、毎年、選考試験に合格した3人が海外研修に出かける。全国、そして北海道各地から入学してきた生徒たちはほぼ全員が寮生活である。新入生は最初の数カ月は2年生と同室で挨拶や掃除の徹底など、寮生活のあれこれをきっちり教



▲教頭・高橋雅彦先生



▲校長・小松信夫先生

え込まれる。問題があればみんなで話し合い、解決していく。この教育効果は絶大で、「5月の連休で自宅に帰ったわが子の成長ぶりに親がびっくりする」という。
ボランティア活動などを通じて地域共同体の一員としての役割も積極的に果たす。村民運動会には全生徒が参加して会を盛り上げるほか、小・中学校と連携した美術・工芸の授業では授業のサポートを担当。多くの授業や行事をこなしながらも、コンクールや課題の創作を喜々として行う生徒たちは、「日本一忙しい高校生」である。彼らの生活を、授業に部活動に、寮に至るまで見守る教師もまた、目が回るほどの忙しさだ。
卒業生の8割は大学や専門学校に進学。美術系、文系等進路はさまざまであるが、生徒たちは互いに磨き合い、高め合い、支え合い



▲一人ひとりが作品に向かって集中



▲自分のデザインに見合う木材をさがす。気に入った木には自分の名前を！



▼通常の授業にも気を抜かせせん



▼学校祭のポスターづくり



◀上／学校祭の各係は学年混合のグループで作業する
下／学校祭で発表されるのは、各学年ごとの演劇や合唱。練習にも余念がない



▶2年生の課題作品
“工具箱を収納できるイス”





▲幼い頃の自分の写真を題材に



▲構図に悩む2年生に3年生がアドバイス「まず描くことだよ。だめなら描きなおせばいいんだから」



▲時間を忘れてキャンパスに向かう

入学試験合格者には、合格通知とともに工具箱の設計図が送られる。自身が使う工具箱を入学までに自分で作るのだ。出来上がりの意匠はさまざまである。「私は、ずらーっと並んでいる工具箱を見るのがとても好きです」と話すのは、校長の小松先生。親が、これから3年間離れて生活する子供と一緒に作ることが多いようだが、独力で意匠を凝らして作る子供もいるそうだ。いずれも親と子の思いがこもった作品である。工具箱の中に入る鑿のみや鉋かん、金づちなどの道具類は、入学時

工具箱に込められた思い

ながら3年間を過ごし、それぞれの夢を着実に引き寄せていくのである。



▲工芸をやりたくて奄美大島からやってきました(1年生)



▲2年生の課題「自画像」を手に。「ペンギンの骨が好きなので、自画像にもいっぱい描きました(3年生)

に一式村からプレゼントされる。「道具は職人の魂です。学校の備品を貸し出すのではなく、自分の道具を大切に扱い、手入れをすることを覚えてほしいという思いです」と校長先生。作業着も村からの入学祝。授業で使う木材も村が用意する。保護者の負担は3食込みの寮費2万4700円と旅費の積み立てや必要な経費だけで、それ以外のほとんどは村が支援する。スウェーデンへの海外研修費用の多くも村が支出。小さな村が、子供たちの未来を全力で支えている。



▲「姉2人もこの卒業生です」。2番目の姉の卒業作品の前で(1年生)



▲「この生活はほんとに濃いです！毎日が忙しくて」と美術部部长(3年生)



◀左/同じ釜の飯はセルフサービスで
右/夕食の前に相撲観戦



▲3年間の思い出を紡ぐ工具箱

学校は村の基幹産業

学校の歴史は、昭和25年の北海道名寄農業高等学校音威子府分校開校にさかのぼる。28年には北海道音威子府高等学校となったが、その後、急速な過疎化により生徒数が減少、52年には廃校の危機に瀕した。「村の小・中学校も次々と閉校する中、高校だけは絶対残したいと存続運動を起こしました」と語るのは、当時村で唯一製材業を営んでいた河上實さん。そのとき、森林資源を活用して木材工芸の教科を設ける案が取り入れられ、村は工芸科設置のための環境を整えた。結果、道内から20人以上の生徒が入学、廃校の危機を免れた。また彫刻家の砂澤ビッキが移住して創



▲ビッキ記念館



◀音威子府工芸高校の沿革を語る河上實さん

作活動を行ったこともあり、当地は工芸の村として注目を浴びた。昭和59年に村立の全日制・工芸科の高等学校として自立。学校の発展にかかる村の熱い思いを込めた決断だった。平成14年には校名を「北海道おといねっぶ美術工芸高等学校」と変更し、翌年工芸コースと美術コースの2つのコースを設置。マスコミにも取り上げられ、志望者も増加した。「この村で学び、人間的に大きく成長した子供たちが、音威子府の看板を背負って全国で活躍してくれればいい」と河上さん。



▲渡辺さんの卒業制作。「イスはひいおばあちゃんにプレゼントします」
▶昨年卒業した渡辺さんは、現在音威子府の地域おこし協力隊。「音威子府にいと落ち着きます」

村立の学校となってから28年。高校は音威子府村の基幹産業となった。村の財産は、世に羽ばたいていく卒業生そのものなのである。

(文/村上憲加 写真/満田美樹)



▲全校生徒で村民運動会に参加



▲高大連携の東海大学教授の授業に聞き入る



◀小学校との連携授業で子供たちをサポート

●北海道おといねっぶ美術工芸高等学校
☎01656-5-3044
<http://www5.ocn.ne.jp/~otokoh/>

農山村の人々と交流・支援する

50歳から始める「極奥三河」地域体験／地域産業支援プログラム



愛知県北東部の奥三河は、神秘に包まれた森、清らかな川、多様な生物の棲む自然郷。豊かな自然の中に里山があり、人情と昔ながらの伝統、暮らしの技が息づいている。

奥三河を知り尽くした「名人」と一緒に、都会では決して味わうことのできないゆったりした時を過ごす、大人のためのプログラムが「極奥三河」。対象年齢は50歳以上。奥三河の魅力や地場産業を知ってもらう「地域体験プログラム」と、奥三河の地域産業に触れながら長期間お手伝いしてもらう「地域産業支援プログラム」がある。

●地域産業支援プログラムでは、①津具森林組合の指導で下草刈りや間伐等の単純な森林作業、林道整備等を予定。期間は2週間から、宿泊施設は古民家の民宿 ②愛知県淡水養殖漁業組合の指導で、餌やりや選別、加工場での手伝い、販売等を予定。1週間から、宿泊は公共の宿。日当等は出ないが、参加費・宿泊費・食事はすべて無料。最少催行人数2名以上。

●地域体験プログラムは、奥三河を知り尽くした「名人」から技を学ぶコースで、麴とチ

ーズ作り等の「おいしい農村の技を学ぶ」、高原や森林散策・炭焼き・郷土料理を学ぶ「森林の中でリフレッシュ」、蜂追い体験をする「蜂の生態を観る等」がある。これらは2泊3日から3泊4日までの日程で、宿・食事付で2万〜3万円の実費が必要。好評で、二度三度と参加する人が多いようだ。

- 地域体験プログラム
☎0532-54-5679
- 地域産業支援プログラム
☎0532-51-2181

東三河広域協議会
高校生が森・海・川の「名人」を訪ねる
「聞き書き甲子園」

森や海・川に関わる生業で優れた「名人」を訪ねて、その人の人生や技を学んで聞き書きする「聞き書き甲子園」は、10年の歴史があり、毎年100人の高校生が参加している。参加希望者は夏に3泊4日で聞き書きの手法等を学び、後は自分で名人に連絡を取り、会いに行く。インタビューしたものを「聞き書き」レポートにまとめて提出、それらは作品集として電子図書館で公開されている。
主催しているのは同実行委



名人をインタビューする高校生

員会とNPO法人「共存の森ネットワーク」で、「聞き書き甲子園」で農山漁村に関心を持った若者は、OBたちが立ち上げた「共存の森ネットワーク」主催のフィールド活動に参加して、農作業の手伝いや森の保全活動等に出かける。名人を訪ねた時の感動や親切

地域資源を美味しい特産品に

雑穀在来種を保全・活用
山梨県小菅村

東京から2時間余で行ける小菅村(人口800人)は、多摩川源流の小菅川、相模川源流の鶴川が源を発する清流の自然郷。平地が少ない上に日照時間が少ないため米作りには適さず、代々様々な雑穀が作られてきた。しかしヒエやアワ等の雑穀は食生活の変化



共存の森ネットワークに参加した若者たち

に対して「お返し」する気持ちで誕生した活動だといいい、知り合った名人や地域をその後も時々訪ねる若者が多いといふ。大学生や社会人を対象に農山漁村地域の暮らしを学ぶ「なりの創造塾」もある。
聞き書き甲子園実行委員会
☎03-6432-6580

で日本ではほとんど栽培されなくなり、関東では小菅村が貴重な在来種栽培地として残っている。

それには東京学芸大の木俣美樹男教授(民族植物学)が30年前から小菅村や上野原町に通って雑穀の栽培状況を調べ、農家の人たちと条件の異なる畑でいろいろな雑穀を栽培して、種を守ってきたという経由がある。しかし小菅でも在

地域体験プログラムに参加した人達



全国過疎問題シンポジウム 2012 in あいち



香嵐渓

開催日 平成24年10月11日(木)～12日(金)

開催場所

・全体会／新城市新城文化会館
・分科会／豊田市・設楽町・東栄町・豊根村

日程

■10/11 全体会 新城文化会館大ホール
13:00～16:50 開会式・過疎地域自立活性化
優良事例表彰式・基調講演・情報提供
16:50～パネルディスカッション

17:00～19:30 交流会 新城観光ホテル

■10/12 10:00～12:00 分科会
豊田市 足助交流館・飯盛座
設楽町 つぐグリーンプラザ 多目的ホール
東栄町 花祭会館
豊根村 とよね文化会館村民ホール
13:00～14:00 現地視察

主催／総務省・全国過疎問題シンポジウム実行委員会
事務局／愛知県地域振興部地域政策課山村振興室
☎052-954-6097 fax052-954-6906

編集後記

▼今回は各地の山間地集落を訪ねたが、高知県の山深い里や斜面に家々が立ち並ぶ集落は鮮烈だった。先祖たちが山の幸とおひさま、清流の恵みを頂いて不自由なく暮らしてきた桃源郷。でも現代人はそこで自給自足の生活をするのは難しい。それを県や市町がしっかりフォローして僻地での暮らしを支え、住民は感謝しながら穏やかに暮らしている。「幸せパートナーシップ」の原点があった。

▼若者も地域おこしや支援活動の一員として各地で活躍はじめているが、定年後に故郷へ帰って地域振興に取り組む中高年はまだまだ少ない。実家をどうするか、耕作しない農地や手入れしない山林をどうするか、今一度家族で膝を付き合わせて考えて欲しい。(A)

▼北海道一小さな村で出会った高校生たちは、将来の夢や目標を描きながら、充実した時間を過ごしていた。その瞳のなんと美しく、輝いていることか。それも彼らを見守る先生や村の人といった大人たちの情熱があつてのこと。若者たちに夢や目標、そして働く場さえ与えられない国になりつつある日本に欠けているのは、次代を担う若者に対する大人たちの情熱なのだ痛感した。(M)

De POLA No.42

【でぼら】2012年

発行日／平成24年10月5日

発行所／全国過疎地域自立促進連盟

〒105-0001 東京都港区虎ノ門一丁目13番5号
第一天徳ビル3階

☎03-3580-3070 FAX03-3580-3602

http://www.kaso-net.or.jp/

編集／(株)編集工房アド・エー

雑穀を栽培する木下さん



来種が減ってきていることから、エコミュージアム日本村構想・植物と人々の博物館を立ち上げ、160㎡の畑を借りて在来種の栽培をはじめた。現在栽培されているのは、そば、もちアワ、うるちアワ、キビ等。木下善晴さんら地元農家と協力して雑穀の栽培を行うとともに、栽培講習会や雑穀を使った料理の提案等を

「すんき」は長野県木曾地方に古くから伝わる保存食の一つで、赤カブの葉を塩を使わず乳酸菌発酵させた漬物。日本の伝統的発酵食品の中では植物のみを使い、しかも塩も使わない健康的な漬物として注目され、平成19年に「味の箱舟」に選定された。地元では各家で作って蕎麦や鍋物にすんきを添えて食べてきたが、最近では木曾町、大滝村の物産

行ってきた。雑穀を使った料理では、雑穀入りカレー、五穀ご飯、クッキー等が作られ、村の温泉施設や食堂で提供されている。限定販売の雑穀発泡酒も人気だ。
小菅村役場源流振興課
☎0428-87-0111
「すんき」乳酸菌で作る
ヨーグルト 長野県木曾町

館等で市販されるようになってきた。木曾町では前信州大農学部教授保井久子さんが所長をする「木曾町地域資源研究所」を開設、すんき乳酸菌を利用した特産品等を研究開発中だが、このたび一般企業よりすんき植物性乳酸菌ヨーグルト「SNKY(スンキー)」が新発売された。まるやかな甘みに酸味がきいていて美味しいと人気上昇中。木曾開田



▲すんき漬物
◀すんきヨーグルト「SNKY」

唐津市呼子町の沖合にある人口700人の加部島で「甘夏あちゃん」と山口めぐみさんの作る「甘夏ゼリー」が全国に知られる人気商品になっている。とうちゃん島で有機栽培する自慢の甘夏を使って、果実を抜いてしぼり、リキュールやグラニュー糖、寒天を入れてゼリーを作り、半球の甘夏の皮に入れたもの。甘夏の香りと味を凝縮しており、ぷるぷるした食感もよく、

高原は間もなく紅葉を迎え、木曾駒たちが出迎えてくれる。特産のソフトクリーム、蕎麦、蕎麦饅頭、高原野菜等も見逃せない。木曾町企画財政課
☎0264-22-4287
島の元気を発信
「甘夏あちゃん」
佐賀県唐津市加部島

今はもぎ取り体験、ゼリー作り教室も開設され、島で民泊して農漁業体験する修学旅行生の交流活動も始まっている。
www.yu-net-ita.com/
amanatu/

売り上げは年間5000万円。通販をはじめたところ人気が出て、雑誌等でも取り上げられたことから、売り上げの半分が通販だという。
山口さんがゼリーにしたのは、島に代々ある甘夏ミカンが輸入のオレンジに押されて売れなくなり、木を切つて廃業する農家が増えてきたこと。何とかしたいと試行錯誤を繰り返してジューシーな甘夏ゼリーが誕生した。土にこだわって無農薬、無化学肥料でミカン栽培をするのはお父ちゃん。近所のみかん畑も協力、息子夫妻も帰ってきた。



自然エネルギーが
地域の活性化剤



水力、風力、太陽熱、温泉・地熱等の自然を活かしたグリーンエネルギーのふるさは農山漁村。ダムを設置せず自然の落差を利用した水力発電、温泉や地熱を利用した農業施設、雪や隧道等を活用した農産物・酒造品の保管等、先人たちが築いた英知の施設はいまもしっかり活かされている。
日本には「100%エネルギー供給地」(自然エネルギーの供給量が需要を上回っている地区)は61市町村あるが、新たに風力発電やソーラシステムを設置する地区や、廃材を燃料にしたり、ゴミや家畜の糞尿をガスや電力に換えるシステム等が農山村で次々と誕生している。
写真は、高知県橋原町の風力発電機(上)、鹿児島県指宿市の温泉を利用した観葉植物栽培ハウス(下)